夏を、旅する

Project Summertime Traveler
Final Round
日本アルプス縦断縦走　報告書

信州大学山岳会
記、高橋旅人

Ⅰ、報告

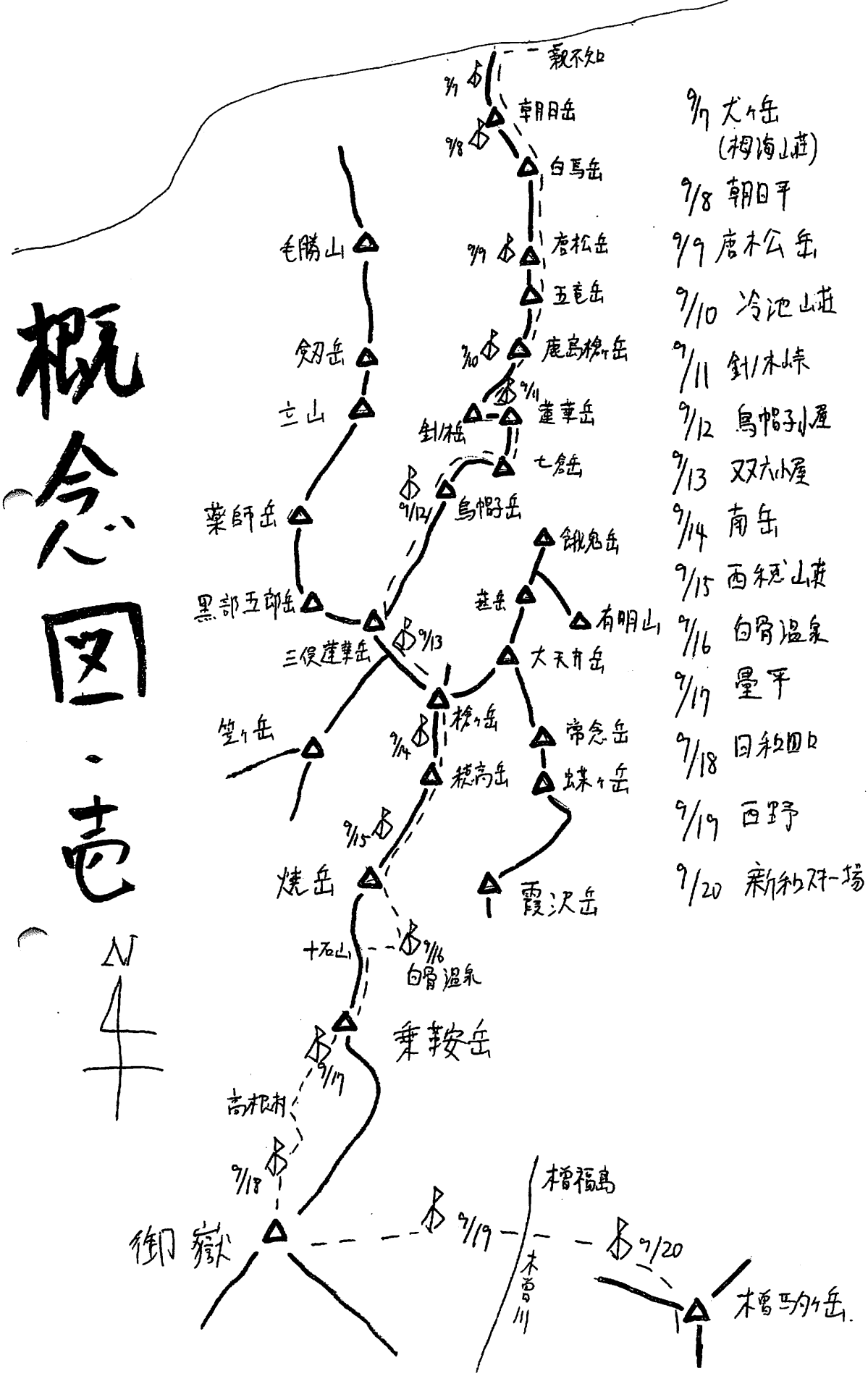
Prologue　親不知 ------ 4
第１章　解放 ---------- 6
第２章　夏影 ------- 9
第３章　駆け抜ける日々 ---- 19
第４章　夏の旅人 ----- 17
第５章　解夏 ------ 22
Epilogue　回帰 ----- 25

Ⅱ、行動の記録 ------ 27

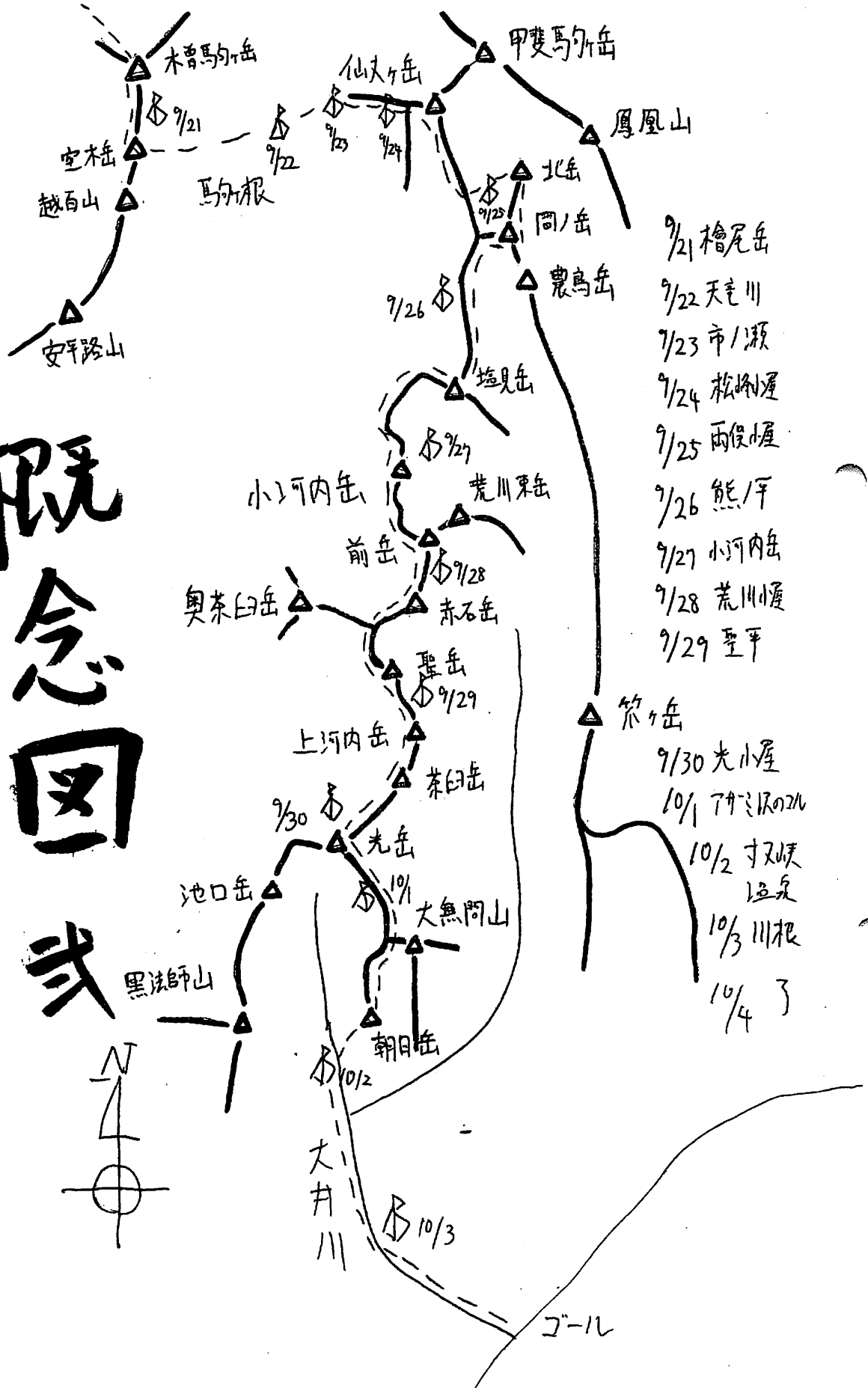
Ⅲ、雑感　そして、夏を旅する -- 28

Project Summertime Traveler Final Round
Walk along ridge on Japan Alpus
Ascended by Akihiko Takahashi and written by Tabito Takahashi

概念図 壱


N
親不知
9/7
朝日岳
9/8
白馬岳
9/9
唐松岳
五竜岳
9/10
鹿島槍ヶ岳
9/11
蓮華岳
針ノ木岳
七倉岳
9/12
鳥帽子岳
毛勝山
剱岳
立山
薬師岳
黒部五郎岳
三俣蓮華岳
9/13
餓鬼岳
蓮岳
有明山
大天井岳
槍ヶ岳
9/14
穂高岳
笠ヶ岳
常念岳
蝶ヶ岳
9/15
焼岳
霞沢岳
十石山
9/16
白骨温泉
乗鞍岳
9/17
高根村
9/18
御嶽
9/19
9/20
木曽川
木曽駒ヶ岳
9/7 犬ヶ岳
(栂海山荘)
9/8 朝日平
9/9 唐木公岳
9/10 冷池山荘
9/11 針ノ木峠
9/12 鳥帽子小屋
9/13 双六小屋
9/14 南岳
9/15 西穂山荘
9/16 白骨温泉
9/17 畳平
9/18 日和田口
9/19 西野
9/20 新和田口

概念図 弐


木曽駒ヶ岳
甲斐駒ヶ岳
仙丈ヶ岳
鳳凰山
空木岳
越百山
駒ヶ根
北岳
間ノ岳
農鳥岳
安平路山
塩見岳
小河内岳
荒川東岳
前岳
奥茶臼岳
赤石岳
聖岳
上河内岳
茶臼岳
光岳
池口岳
大無間山
黒法師山
朝日岳
笠ヶ岳
大井川
ゴール
9/21
9/22
9/23
9/24
9/25
9/26
9/27
9/28
9/29
9/30
10/1
10/2
10/3
9/21 檜尾岳
9/22 天竜川
9/23 市ノ瀬
9/24 松崎小屋
9/25 両俣小屋
9/26 熊ノ平
9/27 小河内岳
9/28 荒川小屋
9/29 聖平
9/30 光小屋
10/1 アサヒ沢のコル
10/2 寸又峡
温泉
10/3 川根
10/4 ?
N

Ⅰ、報告

Prologue　親不知

2001年8月

ザアァァァ…　　ザアァァァ…

断崖に打ち寄せる波音は絶えることなく、一つとして同じ音は無い。それに耳を傾けながら僕は断崖に据え付けられた遊歩道を、自転車でゆっくりと走っていた。

海。

今は曇っているため吸い込まれるような空を反射して青い筈が、どこか沈んで見える。それが漠然と足元から広がっていき、やがて緩やかで美しい弧を描いた水平線に吸い込まれる。そこを境に鈍色の雲に覆われた空が海と対峙する。それが今の親不知だ。

頭上にのしかかる壁にへばりついた草葉を揺らす海風に乗って、僕はゆるい下り坂を駆けていく。やがて遊歩道は終わり、右手にはホテルやトンネルの出口が現れた。いつしか波音は国道を走る車の騒音へと変わり、空気も排気ガス臭くなってきた。

国道を渡り、山側の待避所で自転車を止めた。そこには木を模したゲートが、階段の先に佇んでいる。そして、こう書かれている。

「アルプスと海をつなぐ　栂海新道登山口」

まだ建てられて間もないのか、漆黒の文字とは対照的に背景は鮮やかな肌色だ。

栂海新道。僕がこの道について知っていることといえば、せいぜい白馬岳から海まで降りてくることのできる唯一の道というくらいだ。ガイドブックのコースメモなどもう忘れてしまった。一つだけ確かなのは、日本アルプスを縦断する者にとって避けては通れぬ道、ということだ。

ゲートを潜りその先の様子を見に行ってみる。道はすぐに左に折れ曲がり、暫くコンクリートの塀沿いに進みやがて右側の山へと消えていった。塀や林床を被うツタがどこか重苦しい雰囲気を醸し出しており、それに重圧を感じてすぐさま踵を返して自転車の所まで戻った。このゲートを潜るには、0 から 3000 へ登ろうという強い意志がなければならないと感じたからだ。

自転車をゲートの前に移動させて、使い捨てカメラで写真を撮った。

（次にここにくるのは山登りでだ）

胸中でそう呟き、僕は親不知を後にした。

2004年8月17日

土砂降りの雨の中、僕らは暗い杉林の中を下っていた。といっても前の二人、豪と片岡はだいぶ前を行っている。もうじきゴールなのが分かっているためか、やけに元気だ。僕はそれを見下ろしながら佐山としんがりを歩いた。

時折木々の間から、うっすらと青みがかった青白い空間が見える。もう海は届くところだ。次第に下界の騒音も大きくなってくる。普段は耳障りなこの音も、今は帰ってきたという安堵感をもたらしてくれる。これが聞き慣れたボリュームになった頃、薄暗かった登山道の先が漸く明るくなってきた。アスファルトの路面とコンクリートの塀が、木々の間から見える。そこまで行けば国道8号線は目の前だ。塀に沿って左に曲がり、木を模したゲートを潜った。ついに自分の人生の中で最長の山旅は終わりを迎えた。

ひとまずザックを置いてゲートに振り返ってみた。三年前に見た鮮やかな肌色は、風雨に晒させて随分と色褪せ黒ずんでしまっている。この記憶のギャップが、三年という僕にとって短いようで長い年月を感じさせた。皆ザックを置いて各々感傷に浸っているかもしれないが、それを感じられるのは僕だけであろう。

三人に声をかけて国道を渡った。ここまできたら、当然お約束の海水浴だ。勇んで少々苔む

したコンクリートの階段を駆け下りていく。下ると同時に車の騒音は遠のいていき、代わりに規則正しく囁くような波音が大きくなってくる。久しく離れていた、憧れの音。

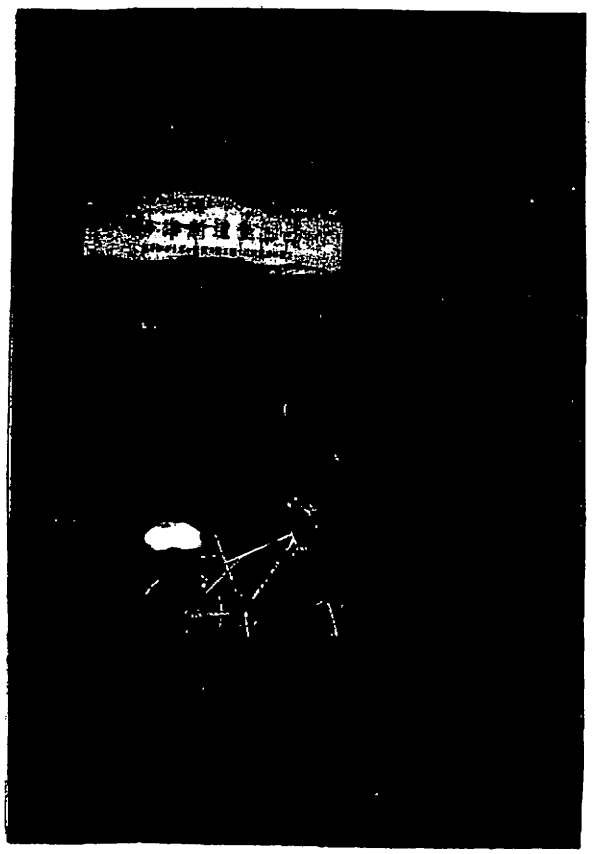
海岸に降り立ち磨かれ抜かれた小石を踏み分け、波打ち際に近寄る。生憎空は灰色の雲に覆われている。それどころか雨足が強くなってきた。こうなったら、空が僕らを目いっぱいのシャワーで祝福してくれている、と思い込むしかない。

海。眼前に遮る物は何も無い。この天気のおかげで海は色褪せたような青であるが、それでも僕が憧れ続けた風景であることに変わりは無い。どこまでも続いていくかのように思われた山々も、断崖となって海へ落ち込んでいる。そして、ここから果てしない海が広がる。思わず熱いものがこみ上げてくるが、今はこらえることにしよう。何故ならここがこの旅の終着点であると共に、次なる旅の出発点なのだから。

四人で肩を組み、日本海に歌声を轟かせた。雨はますます強くなってくる。でも皆よい顔だ。そして、我先に服のまま待望の海に飛び込んで行った。少々波が強いが、13日間汗にまみれてきた野郎共には最高の洗濯だ。登山者が海で溺れるなんてのは笑えない冗談だが。

やがて泳ぎ疲れると自然と海から上がり、この海岸を後にした。遠ざかる波音に背を向け、階段を登っていく。もう振り返ることは無い。何故なら僕はまたこの地に帰ってくるからだ。更なる熱い旅の出発点として。

親不知。始まりと終わりの場所で、旅人はまた新たな旅を始めていく。



第１章　解放

2004年9月6日

直江津に向かう電車に揺られる僕は、少々曇りがかった窓をぼんやりと眺めていた。そこには閑散とした車内と、その先の闇に点在する光を映し出していた。電車は規則正しいリズムを刻みながら、闇の中を突き進んでいる。それは期待と不安に胸を膨らませる鼓動、というよりは僕の心の平静を表しているかのようだ。

今僕は親不知へと向かっている。かねてから計画していた、日本海から太平洋へ山を通って歩く旅のためだ。起点は日本海・親不知。期間は約一ヶ月。勿論こんな長丁場は今までに経験は無い。体力が持つのか、心が孤独に耐えられるのか。しかし、そんな不安をよそに、心はどこか落ち着いている。そして、そんな自分を不思議に思わない自分がいる。

下界はしがらみに満ちている。その中で僕は自分を見失い、日々流されて生きている。しかし今僕はここに、いる。下界で形を失った僕の存在を、確かなものとして認識できる。山は決して逃避の場所ではないと思っている。しかし、僕はもう山、というか旅の中にしか生きることができなくなっているのかも知れない。

長野を出発した時あれほど混雑していた車内は、今では殆ど空席だ。思えば移動中こんなに物思いに耽られるのも久しぶりだ。何しろ伊那から松本まで電車に乗るのは、大学に入ってからこれが初めてなのだ。

車内のアナウンスが、直江津にまもなく到着することを告げる。終点間際の閑散とした車内と、車窓の向こう側に浮かぶ乗客を乗せて出発していく電車の明かりは、僕をより感傷的にさせる。しかし、それに浸っていた僕を、ある驚愕の事実が現実に引き戻した。なんと次の親不知行きは、二時間後の終電だというのだ。一度行ったことがあるという理由だけで大糸線を使わなかったのだが、まさかこんな落とし穴が待っているとは。悩んでいても仕方がないので、市内を散策することにした。

駅前の地図に従って、まずは海を目指した。僕の郷里は海の無い群馬で現在も山国に住んでいるため、海沿いの街を歩くだけでも異国を旅しているかのような感覚に囚われる。すでに夜の帳が下りているため概観は掴めないが、どこか雑然とした街並みが、何枚もの板を瓦のようにした家の外壁が、そして微かに鼻腔をくすぐる潮風が、僕にとっては新鮮であった。海岸に出ると、漆黒の闇の中から波音が聞こえてくる。それに耳を傾けながら防波堤の上を歩いた。

駅のホームに戻るとすでに電車が入線していたので、ひとまずザックを中に入れる。そして、今度はホームの散策に出掛けた。地元の人にとっては何気ない風景なのだろうけど、僕にとって北陸本線の駅は旅情を感じさせてくれる。

車内に戻ると僕の荷物が置いてあった所に、酔っ払っているであろうおじさんが二人寝ていた。席はいくらでも空いているので、別に目くじらは立てず僕の方から移動する。ここで声をかけたことが発端で、その二人と糸魚川まで話し込むことになった。何でも地元で山をやっているらしく、白鳥山（梅海新道で最初の1000m台のピーク）にも登ったことがあるそうだ。話は結構弾んで酒まで奢ってもらったが、お説教（気味）には参った。「彼女作れ、就職しろ、親を大事に」と、僕にとっては耳が痛く実現不能な三大文句だ。

彼らとは糸魚川で別れ、いよいよ車内は僕が独占してしまう。そのまま親不知までは一人だった。到着が遅くなってしまったので駅寝することにした。

9月7日

９月の初めとはいえ、晴れの日の朝は冷える。標高が低いから大丈夫だろうとたかをくくっていたら、寒さという予想しなかった理由で目覚めてしまった。もう一眠りと思ったが、乗客が現れ始めたので観念して起き上がった。今日から長い長い山旅が始まるわけだが、まだここでは気持ちが高揚しない。なぜならここから登山口まで国道があるからだ。道中の下界歩きの距離に比べれば何てことない距離なのだが、ここだけは別である。なぜなら排気ガスに咽び、猛スピードでかっ飛んでいくトラックに怯えながら狭いトンネルを歩かねばならないからだ。

右手に海を眺めながらいくつものトンネルを抜けていくと、急に路肩が広くなる。右は親不知ホテル、そして左手は梅海新道の入り口だ。ここでツーリングをしている風貌の青年と擦れ

違い、励ましあった。やはり旅をしている人は、お互い雰囲気で分かるようだ。ひとまずザックを登山口に置き、海岸へ向かう。ところが、海岸へ下る階段の入り口には立ち入り禁止の看板が置かれていた。どうやら台風の影響で、倒木が道を塞いでいる様だった。幸い細い木だったので、下を潜って先に進むことができた。

今回も雨こそ降っていないものの、空は雲に覆われている。この間と似たような空だ。違う点はこれを一人で見ていること。そして、ここが出発点ということだ。暫し水平線を見つめた後、踵を返して波音を背にザックの元へ戻る。次にこれを耳にするのは一ヵ月後、別の海でだ。

登山口で山靴の紐を締め、出発する。まだ陽は照っていないとはいえ標高がとにかく低いので、早くも汗が滝のように流れてくる。時間とともにその量は増える一方だった。入道、尻高山を越え坂田峠から急登にかかる。頭上にようやく広がってきた待望の青空も、今は恨めしい限りである。そのおかげで急登後のシキ割の水場は、本当に天国のようであった。

白鳥山へはここからだるい登り。道中でおばちゃん二人組に出会うが、開口一番で「太平洋に行くんですか？」と言い当てられてしまった。何でも僕の前に二人も太平洋を目指している登山者がいるとのこと。成る程、同じことをやるような人は結構いるもんだな、と一人納得する（そんなことはないんだろうけど）。

山頂には昼過ぎに到着、ここには地元のサワガニ山岳会が建設した立派な避難小屋がある。そして、ここから見下ろす日本海と青空もう言うこと無し。こんな風景にずっと憧れていたのだ。

時間はまだあったし台風も接近しているので、行ける所まで行こうと栂海山荘を目指す。しかしここから連続するアップダウンと暑さで、フラフラになりながら歩いた。おそらく脱水か脱塩になっていたのだろう。特に最後の水場から山荘までの急登は、気が遠くなるような標高差に思えた。

山荘に到着すると、中には既に二人の登山者がいた。そう、おばちゃん達の言っていた、太平洋を目指すという二人である。彼らは今日白鳥小屋発だったが、台風が来るのでここで泊まったそうだ。驚くべきことは、僕を含め三人とも微妙にラインが違うことだ。夕飯を作りながら三人で話したが、このようなことをする人達だけあって話も非常に弾んだ。一番笑えた出来事といえば、今日僕らと擦れ違ったおばちゃん達のこと。きっとこの先彼女等は、栂海新道をでかい荷物担いで登ってくる人はみんな太平洋まで行くんだと勘違いするんだろうな～なんて話していた。また、皆彼女なんていないとのこと。やはりこういうことをやっていればできないのは当然のようだ。時間と共に外では台風の風が吹き荒んできたが、そんなものは何処吹く風とばかりに世がふけるまで三人語り合っていた。

9月8日

朝目覚めてみると、外ではまだ風が吹き荒んでいるように聞こえた。しかし、外に出てみるとガスってはいるものの、風は行動できる程弱くなっていた。ラジオによると台風も大分離れたようなので出発する。因みに他の二人のうち一人は有り余る程の食料を持ってきたらしく早速沈殿。もう一人は少し送れて出発してきた。

始めはガスが吹き付けてくるような感じだったが、犬ヶ岳を越えると徐々にガスは取れ始めてきた。刈り払われたミズナラの低木の中に、時折現れる湿地が粋である。黒岩山を越えると眼前には緑を湛えた湿原・黒岩平が悠然と広がる。下から上ってくると、山奥の桃源郷に辿り着いたような気がして一際感動が大きい。湿原の中を流れる沢水で喉を潤す。

あちらこちらに意図されたかのように、小さな池糖が点在しておりついつい見入ってしまう。広大な湿原が漠然と広がる尾瀬には無い魅力だ。湿原は更に上がったアヤメ平にもある。しかし、ここは登山道の侵食が余りにひどい。やはりこういった場所に、人は立ち入るべきではないのだろうか。

長栂山の辺りから再びガスり始め、風を伴った雨も吹き付けてきた。照葉の池では昨今の雨のせいで大増水し、登山道が水没していた。流石に人跡の無い湿原を踏み荒らすのは良心が痛むので、覚悟を決めて突っ込んだ。おかげで膝までとっぷり浸かって、山靴は早くもずぶ濡れ。今は沢登りをしているんだ、と自分を慰めて先へ進む。そのご褒美なのか朝日岳の登りでライチョウを二羽見ることができた。こんな天気でも（だからこそ？）彼らは元気に歩いている。

前回は海まで見下ろせるほどの良い天気だった朝日岳も、今は嵐の中。雨の山頂に未練は全

く無いので、さっさと朝日小屋に向かう。道中登山道を整備している方々に会ったが、皆一様に驚いた顔をしていた。小屋の清水さんも今日は誰も来ないだろうと思っていたらしく、驚かれてしまった。流石に台風とこの天気で登ってくるやつは、ただのアホなのだろう。

9月9日

午前二時、アラームの音に起こされゆっくりとシュラフから出る。普通なら早すぎるかもしれないが、今日目指すのは唐松岳。自分で設定した一つの試練だ。幸い空は満天の星空。早くも残骸と化したラーメンを腹に収め出発する。

空にはまだ朝の気配は微塵も感じられない。しかし、朝日平から仰ぐ朝日岳は、ぼんやりと闇にその姿を浮かべている。というよりは山体が闇であり、空の方が無数の星のために明るいのだ。何しろヘッドランプを消しても、歩くことに支障をきたさないのだから。山頂へは向かわず水平道に入る。流石に山や木に隠されてしまうので、ヘッドランプを点け直す。月明かりで、銀色に輝く岩が幻想的である。

やがて無数の光を湛えた夜空は徐々に深青になり、その面積を広げていった。いよいよ太陽[illegible]は山頂からの登山道と合流し、赤男山の山腹に広がる湿原を歩いていた。ツバメ岩の辺りで上高地から来たという同世代くらいの青年に出会う。やはりこの辺りはこのような登山者が多いようだ。

昨日とは打って変わっての青空の下、雪倉岳の広く[illegible]な斜面を登っていく。毎度のパ[illegible]と[illegible]を思えると調子が上がってくる。鉢ヶ岳のトラバース道ではハイマツに遊ぶライチョウを見ることができた。人気の白馬から少し離れただけでもライチョウに出会えるのが嬉しい。

白馬の山頂は、8月の喧騒が幻であるかと思うほど静かだ。下手すると松本の駅前位いた人ごみも、今は片手で足りるくらいだ。暫し景色を楽しんだ後、頂上宿舎で水を汲み先を急ぐ。杓子はトラバースするつもりだったが、稜線に人がいるのを見て自然と足は山頂に向かっていた。天狗池の水場はあまりに濁っており、流石の僕でも引いた。

この先は最初の難所、不帰キレット。とは言っても一度来ているし、天気も持ちそうなので特に気負いは無かった。また、いい時間だったので誰とも擦れ違いが無かったのは良かった。しかし、唐松に到着する頃にはガスってしまう。山頂で出会ったおばちゃんと話しながら山荘に下り、やっとこさ到着した。

山荘の方にJ走の時のお礼を渡してテン場に下る。テントを張りながら、社会人で時たま山に来るという人と話したが、やはり自分は社会人に喧嘩を売っているような気がした。逆に言えば今しかできないことだからこそ、最大限に時間を利用してやり残しの無いようにしなければならないと感じた。

第2章　夏影

9月10日

朝、僕は起きるやいなやテントから飛び出し、切迫感に駆られながら山荘への坂を駆け上がった。それは人としての尊厳を賭けた戦いである。悶絶しながらも山荘に辿り着き、ドアを開ける。そこは僕にとって安息の、そして安住の地であった。

唐松山荘、トイレ遠いっす。

空は雲に覆われているが、なんとなく晴れそうな雰囲気を醸し出していた。しかし、大黒岳の辺りから早くもガスってしまう。おかげで五竜の連続ガス記録はまたも更新されてしまった。山頂もガスが絶え間なく吹き付けてくるので、一人で万歳三唱をしてさっさと下る。ここからキレット小屋までは、下手すると不帰や八峰より危険なので気合を入れ直す。

相変わらずのガスの中、岩稜帯を下っていく、雨でないだけまだましとはいえ、ガスった時の登山道の岩場は何の面白みも無い。そのせいか、こんな日は自然と一本を取らず足取りも速くなる。キレット小屋では中で休ませてもらい、小屋の方と暫く話した。冷池の可愛いねーちゃんはまだいるらしいので、ちょっと元気が出てきた。おまけにお菓子までもらってしまった。

外では雨が降り出してきたが、元気に出発する。鹿島槍の山頂までは、雨と早く癒されたかったのでぶっ飛ばす。吊尾根の偽ピークには何度も期待を裏切られたが…。山頂に辿り着くと同時に、雨脚は弱まってきた。鬱陶しいガスも取れ山頂に着くと同時に晴れ、という感動的な光景を期待していたが、何故か何処の山にも雲が纏わり付いておりそれは叶わなかった。

再び雨が降ってきたので小屋まで一気に駆け下りる。テン場には他に二張りしかなく、ここでもJ走の喧騒は何処へやらといった感じだ。余談だがここの小屋の娘は礼儀正しく可愛い。雨の中頑張った甲斐があるってもんだ（殴）。

9月11日

ここ何日か早起きが続いた反動と称して少し遅めに出発。幸い今日は針ノ木までなのでのんびりできる。雨の後の晴れは実に嬉しい。

爺ヶ岳の登りでツアーらしき中高年の団体と鉢合わせしてしまう。流石、この辺りは中高年登山者の天下だ。それは別に構わないが、ツアーの客はいつ何処で見ても興醒めする。まあ、南峰でブロッケンを見られたから良しとしよう。種池まで駆け下りてその後も順調に進む。流石に日本海から上がって来ると、この辺りのアップダウンは何とも思わなくなる。しかし、日陰に入ると肌寒くなってきており、秋が山から里に降りるのを実感する。因みに針ノ木雪渓は忽然と姿を消してしまっていた。黒部の谷筋にはまだ残雪が残っているというのに、日本三大雪渓は何処へやらである。

新越山荘で久々に若い、しかも学生のパーティーと出会う。後で話したら彼らは新潟大学山岳部の方々で焼岳まで行くそうだ。彼らとはこの先抜きつ抜かれつになる。赤沢岳の辺りから曇り始め、ズバリ岳の山頂に着く頃にはガスに包まれてしまった。ここで60位になるおじさんと話した。こまめにテント泊の山登りを続けているとのこと。常に自分を鍛え続けている元気な方で、実に清々しかった。このような方に出会うと、怠け者の自分の背筋を糺される。針ノ木でも少し話をして、一足先に小屋まで下った。

夕方になるとガスも取れ、周囲の山が見渡せるようになった。特に槍は雲海から穂先だけを突き出し、更に背後には夕日に染まる雲を従えていた。乾物だらけの夕飯もこのおかげで一際豪華で忘れられないものになった。そのまま夜に突入し、明日の晴れを約束する星空になったのは言うまでも無い。

9月12日

新人合宿で行き来する槍穂周辺以外で、北アで一番行った場所はどこか。それは何故か船窪～烏帽子間なのだ。別に変な趣味は持っていないのだが…。そんな訳なので例によっての長丁場、早々と出発する。

運華に登っている最中、背後の針ノ木やズバリ岳はモルゲンロートで真紅に染められていた。

稜線に出ると一足先に出発した新潟大のパーティーが、大下りを下っているのが見えた。僕はというと、今日のコースのエグさは身に染みているので、クロマメ試食ツアーぐらいの気分で気楽に行くことにする。目指す烏帽子や槍は青空の彼方だ。大下りは登るのも辛いが、下りも膝に良くない。そこら中にたわわに実ったクロマメだけが、唯一の救いだ。

北葛の山頂では地元大町高校山岳部のパーティーに出会う。中でも顧問の先生は茨城のIHに出ていたらしいので以前に会っていたかもしれない。自分より若い、特に高校生と出会うと（男であっても）それだけで嬉しい。山で中高年の方が話し掛けてくる時は、こんな気分なのだろうか。七倉乗越まで一旦下って同じだけ登り返す。吊橋の設置を願うのはこんな時だ(笑)。

船窪小屋には寄らず、テン場に直行する。ここの水場はいつ来ても感動する。持てるだけの水を持ち、いざ地獄へと突入。この辺りは来るたびに昔の登山道が崩壊しており、将来は立山経由でなければ、縦断はできなくなりそうだ。水が一気に増えたおかげで、喘ぎながら急登のアップダウンを繰り返す。ここに来ると稜線の爽快な風がいつも恋しくなる。時折見える槍が、弱音を吐く僕を励ましてくれる。

南沢岳まで来ると、白馬や後立山が遥か遠くになってしまったのが分かる。長期の縦走の醍醐味はやはりこういう所にある。ここからは烏帽子の麓に広がる庭園へと降りていく。7月頃この辺りを彩るコマクサは姿を消し、湿地の草は黄色く染まっている。雲上の夏は早足で過ぎ去っていく。山頂を往復して、待っているのは最後の偽烏帽子。それも何とか越えて、漸く烏帽子小屋に到着した。やはりここは何度来てもエグい。でもまたここを歩く自分が容易に想像がついた。

9月13日

槍へ。アルプス銀座は何処もこの頂へと辿り着く。とりわけ烏帽子から槍を目指す裏銀座コースは、いくつもの頂を越えて槍に到達するルートだけあって、昔からあこがれの対象であった。それは今でも変わらないもので、徐々に迫力を増す大槍を想像するだけで心が躍る。幸い今朝の空は晴れ。さあ、槍に会いに行こう。

とはいっても微妙に薄靄がかかる中で出発。それが朝日を乱反射させ、まるで光の中を歩いているかのようだ。三ツ岳の辺りでそれは取れ、見慣れた青空が広がる。そして、槍も見えてきた。はやる気持ちをおさえられず、一気に野口五郎岳まで歩を進める。が、期待と裏腹に徐々に雲が湧き立ってくる。ここでは雲から穂先が突き出すという風景が望めたが、その後槍を見ることは殆どなかった。

爽やかな秋風が稜線を吹き抜ける青空の下、悪絶な山腹のてっぺんにぽつんと建つ水晶小屋を目指す。東沢乗越の先で、堂々と登山道脇にうずくまっているライチョウ出会った。具合でも悪いのだろうか。小屋の軒先にザックを置かせてもらい山頂を目指す。悲しいかな、槍はもう雲の中。ここで還暦記念に 60 日くらいかけて北アー筆書きをやるというおじいさんに会う。話はキレット小屋で聞いていてその時はどこの成金だと思っていたが、話してみると意外といい根性していた。何でも滑落やら雷やらで二度死にかけたけどまだ続けているとか…。この夏は小屋泊まりの人を随分と見てきたが、何と言うか時代は変わった、若しくは自分のやっていることは時代にそぐわないのではないかと感じるようになってきた。

小屋に戻ると新潟大のパーティー二人に会った。四人のうち二人は授業の関係で七倉に降りたそうだ。あちらさんは真面目だこと。彼らと少し話して出発する。この辺りはJ走の時飽きるほど人とすれ違ったというのに、今では人影が珍しい。鷲羽も一人きりの山頂だ。三俣小屋の軒先で少し休ませてもらって三俣蓮華の山頂を目指す。双六小屋までは巻き道もあるが、ここでは当然稜線コースを選択。しかし、残念なことにこの辺りからはガスってしまう。まあ展望は無かったが、双六の平坦な稜線で異世界にいるような感覚を味わえたので良しとしよう。

風が冷たかったのでさっさと小屋に下りテントを張る。このところ乾物だらけの飯を食い続けていたため、小屋の牛丼やらカレーやらが食いたくなったがここはぐっとこらえた。まだまだ修行が足りない。

9月14日

槍はどこから見え始めるのだろうか。位置的には白馬の辺りからだろう。しかし、僕は海、すなわち親不知からずっと槍という頂を想って歩いてきた。例え今は雲の中にその姿を隠して

いようとも、僕の心の中に槍が聳えていることに変わりはない。
夕べからの風は更に強さを増していた。おまけにガスも吹き付けてくる始末。しかし、その程度の風で僕を止めることはできない。と、意気込んで出発したまではいいものの、それと同時に雷が鳴り出してきた。流石に雷に対して有効な手段は持ち合わせていないので、明るくなるまでトイレに避難する。この時テントから逃げ込んできた埼玉の学生さんと空の様子を窺いながら話し込んでいた。何でも立山スタートでJ走をやったことがあるとか。やはり変人はどこにでもいるようだ。
明るくなってから雷はおさまったようなので、意を決してシャワーのような雨の中に突撃。九十九折れの登山道が川になっており、何故登山道で侵食が起こるのかが分かった気がする。時折ガスが切れて深々と切れ込む谷を除けるが、天気は一向に回復しない。寧ろ標高を上げるにつれどんどん悪化している。そのおかげで最盛期は渋滞するような西鎌尾根を独占状態だったが、やはり展望がないと嬉しくない。おまけに何故こんな所に？という箇所にも鎖が設置されている。遭難防止とはいえ鎖の過剰設置はいかがなものか。結局飛騨沢で人影を見た以外は、誰にも会うことなく槍岳山荘に到着する。ひとまず小屋の玄関の中にザックを置かせてもらって山頂を往復することにした。

小屋に戻った後も横殴りの風雨だったので、暫く小屋で休ませて頂く。中では気象情報を得られるので丁度良かった。それにしてもここは本当にホテルのように設備が整っている。その後も天気は回復しないので、ひとまず南岳まで行ってみることにした。
一度小屋に入ってしまうと外に再び出るのがためらわれるが、気合を入れて出発。風に身を任せて斜め歩きができた。夏でこれなのだから冬はとんでもねーと思いつつ風に吠えていた。大キレットはまだ行ったことが無く、この天気で突っ込む根性は無かったので南岳小屋で天気待ちをすることにした。
小屋では同様に天気待ちをしている人がいて、さほど退屈はしなかった。特に茅野からいらしているというMさんと仲良くなり、翌日のテン場もご一緒させて頂くことになった。また、キレットノートを読んでいたらほんど(大木)さんの書き込みを発見する。山で知人の名を見ると、それだけで出会えたようで嬉しい。僕の後からも何人か小屋に逃げ込んできたが、稜線からきた人と横尾の方からきた人で濡れ方の差が歴然としていた。
結局15時まで待ったが、風が収まらなかったのでここで待つことにした。他のテント泊の人は昨夜の風でこっぴどくやられたり、外の風にひるんだのか、皆小屋に素泊まりしていた。僕は貧乏学生の意地を見せるべく外へ。ここのテン場は石で防風壁を作ってあったが、どれも低く用を成しそうにない。そんな訳で補強しようとせっせと石を積み上げていったが、やっているうちにはまってしまい、気が付いたら要塞が完成していた。そして、いつしかガスが切れ、空も晴れてきた。この日の夕焼けは嵐が不純物を全て持っていってくれたのか、汚れの無い純白の雲を鮮血色に染め、やがて青紫の空へと沈んでいった。また、一番空に近いテン場というだけあって、夜空全体が無数の星で煌々と輝いているかのようであった。

9月15日
寒い。シュラフの中で体を丸めこすり合わせても一向に温まってこない。どうやら今朝の放射冷却でかなり寒くなっているようだ。あまりの寒さにある物を全部着て出発する。
紅く燃える東の空や、浅間からたなびく噴煙を横目に大キレットの底に下りていく。所々霜柱が立っていた。大快晴で朝日が差し込む人気かつ有名なルートを、独占していると思うといい気分だ。ただ、南岳からだと思ったより怖くなく、これなら昨日の天気でも突っ込めたかもしれない。滝谷の威容には只圧倒されるのみであったが。
北穂小屋のテラスで一休み。昨日の天気が嘘のように空は落ち着いている。今年に入ってから僕は槍に嫌われたのだろうか。暫くすると小屋の中から腰がひどく曲がったおじいさんが出てきて、よぼよぼと山頂へ向かっていった。何でも小屋の初代オーナー。ヘリで上がってきたというが、本人は歩く気満々だったとか。声もその風貌に反してやたらとでかく生気がこもっていて、やはり昔の岳人は違うなあと嘆息。自分が情けなくなってくる。山頂でも少し景色を見ていたら、昨日小屋でよく話したMさんに追いつかれる。写真を撮りつつも快速で来たと

いうが、僕はというと待望のどピーカンで日和ってしまい鈍行ペースである。
北穂と涸沢の間は意外とやばいと聞いてはいたが、この好天のおかげで特に厳しくは無さそう。時折振り返っては槍を眺め、名残を惜しんだ。穂高岳山荘もホテルのような設備で小屋の前には大テラスがある。そこからお馴染みの涸沢を見下ろしながら休憩。５月はあれほどの雪を湛えていたカールも今では岩しかない。
ここから奥穂の山頂までは中高年が多く、追い越すのに難儀する。そうしているうちに、気が付いたら山頂に到着。高校時代に来た時はもっとかかったような気がしたのでびっくりした。この好天で山頂は大賑わい。しかし、これから僕が行く先に人の気配は無い。ジャンダルムを眺めていると、否が応でも緊張してきた。
いよいよ日本の一般縦走路でも、最難と言われる区間に突入した。浮石のせいか異常に緊張して思うように足が動かない。切れている稜線だけあって景色は最高だが、その分緊張感も並ではない。びっくりしたのは、ガイドが４人もおばあちゃんを引き連れていたこと。仕事とはいえようやるわ、と感心する。それにしてもガイドの横柄な態度は少々頭にきた。その後も浮石にびびりながらも天狗のコルに到着し一息入れる。ここでＭさんに追いつかれるが、何でも去年来た時より浮石が増えているとか。彼に先に行ってもらって後を追う。その後もガレ場と鎖場のアップダウンが続き、中高年パーティーやＭさんを抜いて西穂の山頂に到着。その頃には稜線はガスり始めてきた。片寄さん達はよく冬にこんな所に来るなあと感心する。僕は根性が無いので敗退しそうだ。
山頂で再びＭさんと合流して一緒に記念撮影。この山行で初めて他の人と写真に写った。その後も彼と話しながら西穂山荘に下った。
ひとまずテントを張って乾杯。下界でも滅多に飲まない生ビールを奢って貰った。その後はテントに戻って各自夕飯を作る。かなり元気な老夫婦に話し掛けられ、写真まで撮られてしまう。ご主人はキスリング時代から山を登っていたとのことで、昔は奥穂～西穂間に鎖なんて無かったという。改めて昔の岳人の凄さを思い知らされる。夕飯後も星空を肴に飲み直す。お互いの山について語り合うが、僕はどちらかというと山で楽しむ性質だが、彼は山を楽しむタイプというのが話していて感じた。彼の話を聞いていると行きたい山がまた増えてしまう。そんな話をしていると、定年を機に色々な所を見て回っているというおじさんが話しに混ざってきた。更に彼の奥さんが来た時は、ガスが取れ天の川が夜空に走った。
山における出会い。それは人であれ景色であれ、すべてが偶然のように思えてきてしまう。昨日南岳で足を止めていなければ、Ｍさんとの出会いは無かった。澄み渡った夕暮れの空や、快晴の穂高も無かった。そして、この老夫婦との出会いも無かっただろう。でも、これは偶然ではなく運命なのだ。そうでなければ目まぐるしく変わる天気や、幾億の人がいる中で、こうした偶然に似た素晴らしい出会いがある筈無い。そしてこれからも、僕は山旅に欠かせない運命の出会いを続けていくのだろう。

第3章　駆け抜ける日々

9月16日

朝の陽光は、山荘前の広場に優しく降り注いでいた。昨日ほどではないが放射冷却で冷え込み、もう一度身が引き締められるようだ。穂高とはこれでお別れだが、まだ行程は2/3以上あるので再び気合を入れなおすことにする。ここ2日間山旅を共にしたMさんとは、一緒に写真を撮ってここで別れた。彼は今日で下山するので、豪華な食料を沢山頂いた。今日は予備で行動しなければならないので、本当に有難かった。また、昨日一緒に写真を撮った老夫婦にも食料を頂いた。こうして沢山の思い出と感謝を胸に、西穂山荘を後にした。

焼岳小屋までは昨日とは打って変わって、暗い樹林の中を行く。右手には朝日を浴びる笠ヶ岳や錫杖岳、左手には逆光の霞沢岳が、今いる稜線を挟んで対峙している。小屋の前にはそれと同じ高さくらいあるボルダーが鎮座している。岩があったら登りたくなるのがクライマー、ということで早速取り付くが、生憎山靴で9日間も歩きつづけてきた僕ではとてもじゃないが敵わなかった。

ここからは火山の影響か森林は無くなり、砂れきと岩の荒涼とした登りになる。その中に点々と生えた草が風に靡いており、秋晴れの青空と共に爽やかさを感じさせる。山頂直下では、懐かしさを感じさせられる火山ガスの臭いが漂ってくる。この臭いは草津の温泉や、そこでの旅の記憶を思い出させてくれる。思い出を懐かしむよりも未来への憧れを抱いている方が、前向きであるし心も踊る。しかし、時には思い出を引出しから出して、未来への糧にするのも悪くはない。中の湯からの登山道との合流点にザックを置いて山頂を往復する。ここで中の湯から上がってきたというおじさんと写真を撮り合う。

中の湯へは下り始めこそ上りのような荒地だが、いつしか鬱蒼としたコメツガ林に変わっていった。こちら側では何人もの登山者とすれ違い、中には行き先を告げると記録を読ませて欲しいといってくる人もいた。が、HPは持っていないし作る気も無い（ついでに技術も）のでそれは無理であるが。駆け下りるように標高を下げてゆき、久々に車の音を耳にした。普段は耳ざわりなこの音も、今だけは嬉しい。登山口まで降りると久々の下界である。とはいえ北ア縦断ならともかく、まだまだ半分以上もあるのでこれといった安堵感はまだ無いが。

ここから白骨温泉へは林道歩き。とはいっても北アの林道なので気分は晴れやかだ。これが南アだった日にゃあ…。林道は通行止めになって久しいのか、あちこちで土砂崩れがおきている。また、道端に動物の糞が転がっていたり、鹿なんかもいたので徐々に自然に帰っていくのだろうか。下りはだるかったので走った。

ひとまず温泉に入って10日分の汗を流す。そして、久々の下界に我慢できずそば屋に駆け込む。ここのおばちゃんにとうもろこしを頂いた。夜は下の駐車場にテントを張らせてもらった。

9月17日

山は晴れてこそ。中には雨が良いという人もいるが、それは雨で地獄を見ていないからだ。とりわけ朝から雨だと気鬱になる。今朝もそんな出発だった。

十石山を目指すべく、林道を少々歩いてからまだ暗い登山道に入る。踏み跡は付いているが、両側から笹がせり出しているので少々うざい。しかし、急登が終わると道は良くなってくる。先日の台風のせいか巨大な倒木がいくつかあった。そのうち頭上を追おう針葉樹も無くなり笹と広葉樹へと川ある。紅葉の時期に晴れたら最高の景色なのだろう。稜線に出ても相変わらずのガスと雨で、十石避難小屋に逃げ込んだ。

中に入ると、乗鞍高原にお住まいでこの小屋を管理している会の方々二人がいらっしゃった。彼らは作業のために来ているとのこと。彼らには休ませてもらうだけでなく、温かいお茶やお菓子までご馳走になってしまった。この小屋は有志の方々が協力して建設したとのことで、噂に違わぬ素晴らしい小屋だった。損得抜きでそのような事業をやり、しかも見ず知らずの僕のような登山者に優しくしてくれるのだから頭が下がる思いである。また、ここの小屋の建設には山岳会のOBの方も関わっているらしく、何の偶然か今回留守をお願いした

豊田さんもその一人だという。色々な逸話も聞くことができ、偶然にしては本当に出来過ぎた出会いであった。

2人に送り出して頂いて乗鞍を目指す。ハイマツは刈り払われているものの、登山道には笹やシャクナゲが多い茂っている。ハイマツが無いだけでも大助かりだが、シャクナゲは精神的に良くない。また稜線上は崩壊が激しく、心臓にも良くない。

金山までは順調だったが、ここの下りでトレースを外してしまい3～4時間ハイマツと格闘する羽目になった。しかも、気が付いたらザックカバーが無くなっている始末。この時ばかりはもっさもっさと生えているハイマツの海を焼き払いたくなった。このおかげでかなりの時間と体力をロスしてしまい、畳平までは非常にだるかった。雨は最後まで降り続き、小屋以外では憂鬱な一日だった。

9月18日

初めて乗鞍に来たのは小学校の頃。どこまでも続く蒼い深山が、夏でも山腹に残る雪渓が、そして見たことのない高山植物と、何もかもが新鮮だった。そして、高校2年の自転車旅行は生憎ガスの中だったが、自分がそれから変わったことを感じた。あれから僕の山を見る眼はどう変わっただろうか。

畳平にはバスで観光客が上がってこれる。天気は相変わらずガスが吹き付けてきている。それでも観光客は来るもので登山完全装備の僕は非常に浮いていた。こんな天気なので一気に山頂を目指す。山頂にいる人はほとんどが軽装。流石は日本一簡単に登頂できる3000m峰だ。畳平からここに来るのは登山の範疇から外れている気がするが、子供や初心者の山への扉を開くには最高の頂なのだろう。僕だってここに来たのがきっかけで今があるのかも知れないのだから。

一休みして下りにかかる。飛騨側の登山道は入り口がわかりにくく、コンパスで方角を合わせて適当に下る。程なくして道標や赤ペンキマークが現れた。ガスってなければ一発なのだろう。乗鞍の南面は今までに行ったこともなければイメージも湧かなかった。しかし、いざ行ってみると山中を道路に蝕まれた東面や西面とは大きく違い、その美しさに心を奪われるほど素晴らしかった。朝日で光り輝く朝霧の彼方に望める高天ヶ原や、どこまでも広がっていくハイマツの海は特に秀逸である。きっと、乗鞍に道路が拓かれるまでは、こんな風景がどこまでも広がっていたのだろう。また、乗鞍では見られないだろうと思っていたライチョウまで見ることができた。

中洞権現尾根は人が殆ど入っていないらしく、登山道にはハイマツやシャクナゲが張り出していて、昨日のトラウマが蘇ってきた。ところが樹林帯に入るなり、クッションの効いた高速道路に変わった。また、至る所にスギヒラタケ（後で分かった）が生えており、乾物だらけの飯に飽きていたこともあって、きのこ狩りをしながら下った。

登山道を下りきって阿多野郷からは下界歩き。下りはだるいので走って距離を稼ぐ。こればかりはとにかくお仕事なので、歌って気を紛らわせながら歩いた。日和田で食料を買い込んで、御嶽の日和田口を目指す。商店のおばちゃんにもらったトマトは久々の生野菜だったので涙。

曇りがちだった天気は日和田高原と開田への分岐の辺りで本格的に崩れ始めた。運良く日和田口の橋の下に良いスペースがあったので、そこにテントを張った。

9月19日

人は余程厳格でない限り、楽な方へと行ってしまうものだ。巻き道があれば名も無きピークは無視される。藪の稜線よりは登山道を、登山道よりは林道を、そして車が入れる所まで車を使う。そうして不便・不快なものは淘汰されていく。日和田口からの登山道はまさにそれであった。

歩き始めて30秒で早速迷った。登山口が見当たらないのだ。仕方なく地形図を頼りに藪を漕いでいくと、導標らしき物があった。が、その先に道は無い。よくよく目を凝らして見ると、踏み跡らしきものがあったので地形図を見つつそれを辿る。その後も藪漕ぎ登山道といった感じで、辛うじて藪の無い部分も全て苔で覆われているという有様。最終的には倒木に行く手を阻まれて完全な藪漕ぎになり、やっとこさ林道に出た。しかも昨日からの雨でズ

ブ濡れである。
ここから先はまともな登山道になった。藪漕ぎ後の登山道は実に快適で、雨が降っているのも忘れそうだ。が、それも樹林帯での話で、森林限界を越えると憂鬱なガスに変わった。御岳の中腹で、晴れろと思わず叫んでしまった。その甲斐あってか継子岳の山頂に着くなり、ガスが取れて青空と雲海が広がった。どうやらここが雲海の浜辺のようだ。
稜線は岩の薄片が墓石のように立てられていたり、ケルンにお守りなどが供えてあったりして、霊山らしく非常に不気味だ。山頂ではお鉢周りをする形で往復。三岳の方からロープウェーが伸びているだけあって登山者は多い。山頂には随分と立派な神社があり、信者らしき人からお神酒を振舞われた。
その後は開田口目指してひたすら下る。先のことの後なのでどうなることやらと思っていたが、倒木の通過以外はすんなりと行けた。それにしても御嶽の森は、北アのここより北の樹林帯と比べてどこか奥ゆかしいものを感じた。屋久島には敵わないのだろうが、もののけ姫の舞台になりそうな苔生し具合である。
開田口からは再び林道に入る。西野という集落に下っていき、バス停で寝ることにした。丁度野良猫が来たのでそいつと一緒の夕飯となった。

9月20日

北・中央・南アルプスを通って日本海から太平洋に行くにあたって、最大の悩みはそれぞれをどう繋げるかだ。どこを歩くかは人それぞれだが、いずれにせよ下界歩きは避けて通れぬ“難関”であった。
薄曇の中昨夜の寝床になったバス停を出発。最早癖になってきた歌で、気を紛らわせながら歩く。開田村の観光案内所で道を尋ねがてら休憩。ここからはアップダウンはあるが距離は短い、旧道の地蔵峠を目指す（案内所のおばさんにけしかけられた!?）。一応ここは開田高原や御嶽山の絶好の展望台だそうだが、生憎この日の御嶽山は雲の彼方のようだ。峠で一休みして下りは走って距離を稼ぐ。お陰で国道と合流するころにはフラフラだった。
そこから少し歩いたJAで休憩。下界では道中の補給は何でもありにしていたが、それが仇となって地蔵峠では日干しにされるところだった。そんなわけで自販機に飛びついた。ここで名古屋からきたというおじさんと暫く話す。
この辺りからはいよいよ次の山旅の舞台である中アが、僕の前に立ちはだかってきた。と同時に交通量も急増し、車に脅えながら路肩を歩く羽目になった。国道20号に合流すると益々車は増え、排気ガスのおかげでやたら咳が出る。途中のコンビニで中ア分の食料を購入。ついでに久々の下界の飯にありつく。コンビニ飯とはいえあまりのうれしさについつい食べ過ぎてしまった。道の駅でこの先の情報を得て20号と別れる。
僕とは生涯縁の無さそうな別荘地の中を歩き、登山口を目指す。薄暗くなり始めたころ、道中の秀山荘温泉に入る。ここのおじさんは昼間に僕が歩いている所を見たらしく、どう考えても入浴料以上のお茶やら菓子やらをいただいた。おまけにこの先のことも教えてくれ、かなり暗くなっていたがスキー場まで歩くことにした。まさか下界でヘッドラ行動をすることになるとは…。結局この日はスキー場のとある軒下で寝ることになった。

9月21日

近くて遠い山。それが僕にとっての中央アルプスだ。僕が住んでいる伊那谷はとりわけ中アが近く、その気になれば木曽駒登山口の桂木場まで、自転車で1時間足らずで行くことができる。それ故にいつでもいけるからと理由を付けて敬遠してしまいがちで、実は今回が夏は初、冬を含め木曽駒は二回目だ。
薄暗いうちにスキー場を出発。残念ながら稜線は雲に隠されている。上空は相当風が強いのか、標高を挙げるにつれ森のうめき声が大きくなっていく。今まで通過した山と森の様子が全く違うので、森林科学科的に非常に面白い。茸が分からないのが非常に悔しかったが。
麦草との分岐には7合目避難小屋があり、その設備に驚愕する。ここは麦草を巻いて木曽駒を直接目指す。時折下界が晴れているのがガスの切れ目から除け微かな期待を抱いたが、それは稜線に出るなり見事に打ち砕かれた。玉ノ窪小屋までくる頃にはガスが吹き付けてきて、気が付けばずぶ濡れであった。これだったら3月に来た時の方がよほど暖かい。稜線は

ずっとそんな調子だったので、休む気にもなれず先を急いだ。テントもこの風では潰されるか飛ばされるので、檜尾避難小屋を目指すことにする。

宝剣の下りはおっかなびっくりで、とにかく慎重にいく。極楽平のケルンには信大の文字があったので、少しお酒を供える。檜尾への登りでは何度も偽ピークに騙され、山頂に到着した時は一安心できた。すぐ様小屋に逃げ込むべく伊那側に下り始めるが、途端に風が弱まって北ので少々拍子抜けする。小屋の前でお酒を供え春寂寥を歌う。その甲斐あってか(!?)夕飯時には突然尾根の周囲だけが晴れ、伊那谷やこれから歩く南アの重厚な山並みを望むことができた。しかし、それも束の間のことで再び小屋はガスに包まれ夜を迎えた。

9月23日

稜線を吹く風は相変わらずで、一晩中小屋を叩いていた。そのため、入り口の戸の揺れる音がノックしているように聞こえ、あまり寝付けなかった。起きてからも暗い小屋の中でそれが続くのだからおっかない。

明るくなってからも風は止まないが、別に行動に支障をきたすほどではない。展望は全く無いので山登りで一番の楽しみは無いが、場数を踏むことで自分が変わっているのが判りそれはそれで楽しい。木曾殿乗越で一息つくが、小屋の休憩料があほらしかったので敢えて外で休む。

空木も相変わらずのガス。結局一度も晴れないまま、中アの稜線から離れることになった。しかも駒石の辺りで急に晴れ始めたので余計に悔しい。樹林帯に入るとダケカンバやナナカマドの葉が色付き始めており、ここでも秋の訪れを感じた。走るように下って池山避難小屋で一休み。ここで一年の書き込みを発見する。時間はまだ大分あったので、今日中に下山することにした。この頃にはもう晴れており、青空の下に広がる駒ヶ根の街並を見下ろしながら駆け下りた。

下界に降り立って山を振り返ると、稜線だけが見事に雲に覆われており、流石に諦めがついた。何故伊那谷がこんなに平和なのか分かった気がする。そのまま日が落ちるまで歩き、天竜大橋の下で寝ることにした。花火に彩られた飯田の方の空を眺め、天竜川の川音に耳を傾けながらの床であった。

9月24日

昨夜は何故か寝られなかったため寝不足の状態で出発。といっても今日は下界で、距離も短いのでたいしたことは無い。いつも通り歌いながら歩く。いきなり地元の人に声をかけられる。そりゃ下界の人にとって、この格好は不思議だよなあ。何せ馬鹿でっかいザック（しかも山靴は外付け）を背負って、田舎道を闊歩しているのだから。

日が昇るにつれて空は晴れてくる。里山はまだ夏の面影を残しているが、空を行く風や谷間の道の差し込む陽光は、確実に秋を迎えている。中沢峠まで登ると、後は市ノ瀬に向けて下るのみ。時たま道端に実っているアケビをいただく。山の恵みを受けながら山を登ることはおおっぴらにはできないが、いつかはサバイバル山行もやってみたいものだ。

市ノ瀬に到着し、早速入野谷という入浴施設に向かう。南アの山篭りに向けて身も心もリフレッシュする。時間は早いが三峰川の河原にテントを張って明日に備える。思えばテントは久しぶりだ。景気付けに晩飯は近くの食堂に行く。超激辛ラーメンがあり挑戦してみたところ見事完食。写真まで撮ってもらった。平家の里、という店でラーメンを注文すると米は食い放題なので戸台からちょっと足を伸ばすのもいいだろう（別に何かもらったという訳ではない）。食事中に降ったのか、帰る頃には路面が少し濡れていた。今後の天気が心配だ。もっともどんな天気だろうが（雷以外）ここまで来たら腹は決まっているが。

テントに戻り三峰川のせせらぎに耳を傾けながらシュラフに潜る。これまでの旅路を思い出し，この先に広がる世界を描く。北アでは様々な人と出会い、中アでは自分に出会った。ここ数日間は山と下界が入り乱れていたが、ここから再び山と向き合う日々になる。南アルプスでは、そして太平洋ではどのような出会いが待っているのだろうか。それを思い浮かべているうちに、眠りへと落ちていった。

第４章　夏の旅人

９月２５日

僕の部屋は天竜川から一段上がった、伊那谷の中ア側にある。そのため窓からは甲斐駒や仙丈を、一望することができる。特にこちらから望む仙丈は、優美で懐の深い山容をしており、登山意欲をそそられる。その山頂から伸びている、平坦で長大な尾根が地蔵尾根である。仙丈というと殆どの人（多分９割８分くらい）は北沢峠側か、仙塩尾根から北上するかのいずれかだろう。しかし、個人的にこの山を味わうためには、この尾根が最高なんじゃないかと密かに思っている。

まずは登山口のある柏木という集落に向かう。地元のおじさんとすれ違いざまに話したところ、やはりここから登る人は稀のようだ。林道の入り口で水を汲んで山に突入する。下部は明るい雑木林や、カラマツ・ヒノキの植林地の中を通る。茸が至る所で顔を出しており、非常に悔しい。仕方ないので所々に落ちている栗を拾って、今夜の飯にしようと目論む。

長い林道も 1900 m辺りで漸く終わるが、カラマツ林はまだまだ続く。晴れていれば林の向こうに仙丈が伊那から見える姿のまま望むことができるが、残念ながら頂はガスの彼方だ。松峰のトラバースを終えると、コメツガやシラビソの原生林に変わり雰囲気が一変する。暗い林床は苔に覆われ、それは登山道や倒木にまで覆われている。そして、自分の足音以外は時折森の静寂を破る鹿と鳥の鳴き声しか聞こえない。幽玄という言葉はこんなときに使うのだろうか。

松峰小屋への降り口のコルには看板があり、それに従う。デポしておいた食料は少々ネズミにかじられていたが無事に回収できた。その後は薪集めに精を出す。この小屋には囲炉裏があるのだ。下の水場は事前に雨が多かったので無事だった。

最近はおおっぴらに焚き火なんてできないが、この炎を見ていると心が落ち着く。赤々と揺れる炎の向こう側には、安らぎが浮かんでいる。昼間は山野を駆け回り、日が暮れたら焚き火を囲んで星を仰ぐ。それが遠い記憶として人間の体に刻み込まれているのだとしたら、今僕はそれを辿っていることになる。薪が尽き、徐々に炎が小さくなっていく。小屋の内部を照らしていた光もいつの間にか弱くなっており、爪先、腰、そして手が闇に溶けていく。そして、最後は一点の赤い光になり、ひときわ強い光を放って消えていく。音もまた味わい深いもので、キャラキャラとか細い音を立て、時折カシャっと崩れてはまた小さくなる。焚き火は光と音の共演なのだ。外では鹿の悲しげな鳴き声。こうして山の夜は更けていく。

９月 26 日

山で突然荷が重くなると、どんな重量であっても辛い。そんな訳で久々に肥大化したガッシャに喘ぎながら出発。相変わらず展望のない鬱蒼とした樹林帯だが、ここには幽玄の趣がある。北アの（特に黒部の谷）のような陰惨な樹林は歩いていて嫌になるが、南の樹林は全く苦にならない。２Ｐ目に入ると体が歩荷することを思い出したのか、漸く楽になってくる。登山道は苔に覆われており踏み跡も疎らになるが、何故か迷うことはない。まるで古の山人に導かれているかのようだ。

この原生林歩きもいつしかダケカンバやハイマツに変わり、頭上を覆っていた木々も青空に変わる。残念なのは何故か今まで歩いてきた中アや北アの山並みだけが、雲に隠れているということだ。一般コースと合流すると、途端ににぎやかになる。小仙丈の方にはツアー客が群がっており、歩を早める。しかし山頂に着いた時は既に遅し。そこは彼らに占領されていた。あまりに興醒めしたので、少し先の大仙丈で休むことにする。仙塩尾根もまた人気の少ない尾根だが、南は人が少なく長大な尾根にこそその真骨頂があるような気がする。まあ南にツアーなんて相応しくないだろう。

大仙丈からは小太郎山や北岳を眺めながら、緩やかに下っていく。南は山の一つ一つが重厚で、畏敬の念を覚えずにはいられない。空の中から緑の光へと再び戻る。樹林の中の伊那荒倉岳で、地元南アルプス市の中高年三人パーティーに出会い、コーヒーやらなんやらいろいろご馳走していただく。彼も今夜は両俣小屋とのこと。途中で追い抜き先に行かせていた

だいた。また、御嶽や乗鞍にあった茸があったので何枚か取っておいた。
野呂川越からは両俣小屋に向かって急降下。深く切れ込んだ谷とその先に聳え立つ北岳を見ると絶望的な気分になる。
テン場受付のために小屋に入ると、中には何匹もの猫がいた。なんと女王様までいるそうだ。暫く小屋の星さんと話して、そのうちに後続の三人や荷揚げの方も到着。早くも小屋の前は大宴会となった。僕も呼んでいただいて、またもご馳走になる。そのうちに雨が降ってきて、小屋の中に避難する。今度は他の釣り人も含めて小屋の宴会に突入。「居酒屋両俣小屋」と書かれた赤提燈の意味がわかった気がする。昔の台風の話などいろいろ話を聞いたが、星さんのすごいところはそのような苦労話をどれも笑い飛ばしてしまうところだ。また釣り人の話に感心してへぇ～ボタンを連打していた。久々にエネルギーに溢れた凄い人に出会った気がする。瞬く間に時は過ぎていき、気が付いたら消灯になってしまった。最後にはお土産まで持たせてもらい、本当に頭が下がる思いである。夕飯も小屋泊まりの方と同じものを食べさせていただき（味噌汁は感動的に美味い）、損得抜きでこうしたことをしてくれる方々に改めて感謝する思いである。こうした人と巡り会えることが、旅の醍醐味なんだと思う。それを改めて感じた両俣小屋での一夜だった。

9月27日

高校時代南アで唯一訪れたのが、北岳を盟主とする白峰三山である。あれから三年が経って僕はどれくらい変わったのだろうか。きっと今日、それに出会えるに違いない。
出発前に昨日の礼も兼ねて小屋に挨拶に行く。最後は小屋にいた人全員に拍手で送り出していただいた。左俣大滝までは沢を何度も渡渉していく。印はあるが増水したら結構やばそうだ。時折岩魚の魚影が見えた。滝の前で一本とって間近で見てみる。あの先にはどんな世界が広がっているのか。沢にはそのような探究心を刺激するものに溢れており、いつかはやってみたいと思っている。
ここから山頂までは這い上がるような急登である。これが南の樹林だからいいものの、北アの陰惨な樹林だったら嫌になりそうだ。残念ながら稜線はガスっており山頂は見えない。中白根沢も頭でかろうじて仙塩尾根が見えたが、それも束の間のこと。標高を上げるにつれてガスは濃くなっていく。そのお陰かライチョウを見ることができた。
ガスっているとはいえ流石は日本第二位の高峰。山頂では何人かが休んでいた。展望は諦めるとしても、壊れた標識が痛々しい。北岳山荘まで一気に下り間ノ岳を目指す。この辺りは植物すらないので、ガスったらただ歩くだけだ。間ノ岳と三峰岳の間で熊の平小屋の方に出会った。今日が小屋閉めだったそうで色々教えてもらった。
三峰岳から下り始める頃にはガスも取れてきた。ライチョウの親子を観察しながら下っていく。三国境を過ぎると葉を黄色に染めたダケカンバに変わってきた。やがて緑の森の中に一際目立つ、赤い屋根の熊の平小屋が見えてきた。
小屋の方が言っていた通り二階の冬季小屋が開放されていたので、そこに荷物を広げる。そして、時間はまだあったので周りを少しふらつくことにした。話には聞いていたが、本当にここは至る所から水が湧き出している。この一滴から水は太平洋への旅を始めるのだろう。これを見ていたら水を買うことが、なんだか馬鹿らしくなってきた。開けた所からは、山肌を黄色く染めた西農鳥を仰ぐことができる。僕がきた方向を振り返ると山全体が黄色く染まっていて、そこにはまるで金銀の宝物が埋まっているようだ。そこを眺めていると自分がオレンジ色に光に包まれているかのようだ。しかし、本当の宝物とは、こんな風景をずっと眺めていられる時間のことなのだろう。

9月28日

目覚めると微かに屋根を叩く雨音が聞こえてくる。音の大小に関わらず、これを聞くと憂鬱になる。しかし、それは歩いているうちに解消されるだろう。きっとそれは南アだからなのだ。南アの樹林帯の雨はどこか優しい気がする。だからこそ鬱蒼と苔むした樹林が映えるのだろう。そして次々に入れ替わる植生も目を楽しませてくれる。
樹林の中の仙塩尾根もいよいよ森林限界を越えて、塩見へのガレた急登を上っていく。遠望した塩見に異質の雰囲気を感じるのはその為か。山頂は例によってガスの中。元気なのは

登山道脇で遊ぶライチョウくらいだ。そのまま一気に塩見小屋まで下る。三伏からの登山者と一人すれ違ったが、彼がこの日山中で会った最初で最後の人だった。
三伏峠まではひたすら樹林の中。雨は強くなる一方で、登山道は川と化してきた。どうやら秋雨前線と一緒に南下しているようだ。時折現れる葉を紅に染めた木々が唯一の救いだ。三伏には早く到着したので、小屋の人に確認を取って小河内の避難小屋を目指す。
沢に一旦下って水を汲み、烏帽子へ登り返す。この辺りから西の空が徐々に晴れてきた。期待に胸を膨らませ、足取りも自ずと早くなる。そうして辿り着いた小河内岳の山頂には期待以上の風景が広がっていた。
西の空から広がり始めた青空は徐々に面積を拡大し、丁度僕の頭上、つまり山頂まで来ていた。東の空はというと、この稜線を境にして黒々とした雨雲に待たされている。そして、純白の雲海は陽光を反射して、眼下の山腹に纏わり付いていた。久々の太陽に思わず歓声を上げる。太陽に照らされることがこれほど嬉しいことはなかった。
夜中トイレに起きると、月明かりに照らされた富士山が眼前に立ちはだかっていた。その大きさに驚くと同時に、いよいよここまで来たという実感も湧いてきた。

9月29日
下界の夜は光に満ちている。夜中に外を出歩いて、人工の光が見えない場所はまず無いだろう。山の上からでは下界は光の海に見える。かといって山が漆黒の闇というわけではない。雲が無く、月の光も弱い時は、そこに星の大海が広がる。空全体がうっすらと、青白く淡い光を放つのだ。満月の夜は、月光で山全体が銀色に浮かび上がる。稜線ならばヘッドラ無しでも歩ける。
昨夜の月を見た時、僕はそんな風景を胸に抱いてシュラフに潜った。しかし、それは出発時に見事に打ち砕かれた。いつの間にやら稜線はガスに覆われており、仕方なくヘッドラを点けて動き始める。もっともハイマツ帯を抜けて樹林に入る頃には不要になっていたが。
刹那、周囲が鮮血をぶちまけたような紅に染まった。朝焼けだ。南アは鬱蒼としたコメツガやシラビソの樹林のために、常に緑色の光の中を歩いている気分だが、この時だけは朝日が森の中を漂う霧で乱反射し、紅の光の中を歩いているようだった。
高山裏避難小屋で一休みし、中にあったノートを拝見する。この辺りまで来ると、書かれている内容も熱いものが多い。また、突然鹿が目の前を颯爽と駆け抜けていった。いよいよ最深部に突入といった感じである。
荒川前岳の辺りまで来ると、漸くガスが取れ青空が見えてきた。東岳まで空身で往復し、荒川小屋に向かう。赤石の頂は雲に隠れて見えないが、そこへ続く平坦な稜線を見下ろせた。南アの南部はどの山も一つ一つが大きく、この山域に惚れる人の気持ちが分かる気がする。
小屋へは予想以上に早く到着したが、今日中に百間洞へ行くのは厳しいのでここに泊まることにする。空を行く片雲を眺めながら飯を作った。あの雲のように風に乗ってどこまでも飛んでいきたいとあこがれる自分がいる。一方で流されることを拒否し、ひたすら流れに逆らおうとする自分もいる。旅にはいずれの面もあるが、逆らい続け自分の意志で歩き続ける。それが登山であり、登山のよろこびなのだろう。

9月30日
山の楽しみは大きく二つに分かれる。一つは景色やら植物やらを見て楽しむ、言わば外的な要素。もう一つは山を通じて自分と向き合う、内面的なものだ。僕はこの旅で最大の楽しみは後者だと思っている。日本海から太平洋へ、自分の定めたラインを歩く。これは視覚やら知識なんていったもので推し量れるような楽しみではない。言わば本人の魂が感じることのできる完全な自己満足である。だからこそ雨が降ろうが風が吹こうが太平洋を目指して歩き続けるのだ。
昨日天気図を書いた時点で、台風が徐々に接近しているのは分かっていた。しかし、外はガスっているものの、まだ風は穏やかである。そんな訳で自分は行ける、と思ったのでヘッドラを点けて出発する。大聖寺平からは明るくなるがガスの中。久々の展望を味わえるハイマツ帯の筈だが、何も見えない。赤石の山頂もただそこに山頂を示す人工物がありました、というだけで頂に立ったという実感は無い。

ここを下り始める頃から徐々に風が強くなってくる。こんな時でも百間平の手前にいたライチョウは元気だ。根性の無い僕は、態勢を立て直すべく百間洞山の家に逃げ込む。入り口には山靴が置いてあり、先客がいたようだ。今日の天気や台風情報から沈殿しているそうだ。まあ、普通だったらそうするんだろうなあ。

彼と少し話をした後、大沢岳に向かう。稜線に出るといよいよ風雨が強まってきた。兎岳の山頂ではとてもじゃないが風上を向けなかった。流石にまずいと思って、荒廃した兎岳避難小屋に一旦逃げ込んだ。床にはゴミやらなんやらが散乱しているが、雨風をしのげるのは有難い。ここでありったけのレーションを腹に詰め、着る物を着込んで突撃。

聖の南側は崩壊して赤茶けている。この威容と風に負けないよう何度も吼えていた。今この風に対抗する手段があるとしたら、それは魂の登りであろう。何度もニセピークに騙されながらも山頂に立つ。最後の3000m峰だが、この天気では特別な感慨は沸かない。ただ一つ頭にあるのは、無事にテン場まで降りるってことだ。

ところがそれを阻むように、下りは更に風が強くなってきた。九十九折れの道を、風に身を預けて下っていく。こんな時は樹林帯，即ち安全地帯に入れたことが嬉しい。結局兎岳から聖平小屋まで、ノンストップで歩き続けていた。

ひとまず濡れ物を干してなるべく乾燥するようにする。南アは開放小屋が多いので本当にありがたい。今後の行動を検討すべく天気図を書いてみたところ、僕が兎岳で風に吼えていた頃台風は吸収の辺りにいたそうだ。とりあえず今夜中の通過と、台風一過のスカっ晴れを期待してさっさと休むことにした。

１０月１日

夕べは荒れ狂う風や、屋根を叩く雨粒。そして、小屋の主ことネズミの足音等、様々な音が入り乱れていた。一番気がかりな台風情報を知るため早速ラジオをつけてみたところ、期待通り谷中に頭上をかっ飛んで行ったらしい。そうと決まればここに留まる理由は無いので、外は雨でも出発する。しかし、一向に天気は好転せず、上河内岳では昨日並みの強風を食らう。晴れていれば稜線でのんびりとしていきたいのだが、風のために茶臼小屋に追いやられる。静岡から来たというおじさんと少し話してから出発する。何だかんだいって今まで一日中誰とも会わなかった日は無い。

茶臼を越えるといよいよ森林限界も終わりに近くなるが、最後までライチョウは登場する。そして、あのグロテスクな泣き声を残して去っていった。稜線から少し外れた仁田岳を往復する頃には晴れてきて、聖や兎岳が漸く巨大な全貌を表す。南に入ってからは散々風雨に痛めつけられていたために、この陽光の暖かさは本当に身に染み渡る。凍っていた体が解かされていくようなそんな感覚だ。

折角晴れてきたのだが、ここからは鬱蒼とした森歩き。易老岳は久々の樹林に覆われたピークである。光に近付くにつれ森は一層深さを増していき、道端の倒木や岩、それを覆おう苔とあらゆるものに神が宿っているような感覚に囚われた。北アの稜線は最早完全に人の世界で動物の気配は微塵も感じられないが、ここでは登山道上に鹿のヌタ場もあったりして動物たちの領域に踏み込ませてもらっているという感じがする。

静高平の辺りまで登ってくると森は無くなり、明るく開けた稜線になる。滾滾と湧き出る水を汲み、光小屋に向かう。振り返れば聖や上河内が蒼空に聳えている。光小屋に荷物を置いて、山頂とその先にある光石を往復。山頂は森の中なので展望は無いが、光石からは南に広がる深南部の山並みが。彼方には微かに水平線を望むことができた。勿論それは二十数日前見たものとは別の水平線である。

小屋には登山者の書き込み用ノートがあり、膨大な量だったので食後の楽しみに回す。このこやでは中から風ぐれの富士山を見ることができるから乙なものである。翌日分の水を汲みに行くころには、辺りは闇に包まれ真紅の月が昇ろうとしていた。スポットライトのような眩い光のお陰でヘッドランプ無しでも歩けるのだ。その光に照らされて、遠くには上河内や聖、そして周囲には銀世界が広がっていた。24日目にして初めての光景である。

小屋に戻って早速ノートを読み始める。このノートは70年代から続いており、いずれの書き込みも、ここまで来た人のものだけあってどれも熱いものばかりであった。各々が魂の山登りをしてきたようだ。中には知っているOBの書き込みもあって、花谷さんの冬季南ア

全山のものを発見。冬の30日間の縦走なんて、とてもじゃないが僕なんかには想像もつかない山行だ。いつもそうだがOBの山の話を聞くたびに、全く歯が立たないと感じる。また、胸を熱くさせられたのが、博多さんの『「情熱」が合言葉の信州大学山岳会』という一言。志向や登る山は違えども、それが各々を突き動かす原動力であることは今尚変わらないのだろう。ほかに気付いた点は、何に数人は日本海～太平洋をやっているということだ。そして、彼らに共通することは（自分も含め）今やっていることよりも帰ってからの下界の生活のほうが難しいということだ（涙）。とにかく膨大な量だったので、読み終わる頃には日付が変わってしまった。勿論今までの自分の足跡を残してきたのは言うまでも無い。

海から始めたこの山旅。それももうじき海で終わる。始めは手の届かないものと思っていた海も間近だ。と同時にこの旅の終わりは、山の終わりでもある。新たな山と、そしてそれを愛する人たちと出会えた南アともお別れだ。しかし、また巡る夏のように、僕はこの山々を訪れようと思っている。神々が棲む深山、南アの重厚な山塊に。

第5章　解夏

１０月２日

昨夜の猛烈な読書のお陰で、目覚めは悪い。しかし、放射冷却された外気に触れると、途端に身が引き締まる。外には霜柱が降りていた。富士山の向こうは朝焼けで真っ赤に染まっている。

光の南にあるハイマツの南限を抜け、いよいよ深南部の森に突入する。展望もこれで終わりなので、目指す大根沢山や信濃俣を目に焼き付ける。普通の人はこのまま柴沢コースの登山道を下っていくが、僕はあえて稜線を選ぶ。何故なら一般ルートには地獄の40km林道があるからだ。百俣沢の頭から先も踏み後があり、ルーファイが面倒な部分も登りになるので、予想以上に早く進むことができた。相変わらずこの辺りは歩いているだけで敬虔な気持ちになる。

信濃俣を越えると標高が下がってきたせいか、どこか懐かしい広葉樹の森に変わる。そして、木々の間を吹き抜ける風はとても優しく、帰ってきた、という気がした。それはまるで故郷の榛名の山を歩いている感じに似ていた。大根沢山へは歩能の登り返し。それを終えると、そこには静寂に支配された平坦な山頂が広がっていた。山頂でありながら、そこにはどこまでも続くかのように整然と木々が並んでいた。聞こえるのは落ち葉を踏み分ける音と、森に木霊する鹿の鳴き声だけだ。

予定ではここまでだったが、時間があるので水を得られるアザミ沢のコルまで移動する。途中で鹿が何頭か、足下の斜面を駆け抜けていった。水場は台風のお陰なのか、去年の８月よりも水量が増えていた。そういえば以前ここで会ったおじさん達が焚き火をしていたのを思い出し、薪を集めることにした。

夜になり月が辺りを照らし出す。樹林帯なので昨日ほど明るくはないが、木々の隙間から零れ落ちる月光がまた風流である。特に沢の中は気が無いので水流が月光を反射している。そして、焚き火炎と対話し鹿の鳴き声や沢のせせらぎにみみを傾けながら、夜を過ごすのだ。

１０月３日

下山日の朝はいつも複雑なものだ。それは早く帰りたいという気持ちと、まだ山に抱かれていたいという思いが交錯するからだ。特にシュラフに潜っている時はそれが強い。日程的にはもう一日くらい余裕はあったが、最終目的地は海である。ということを胸中で反芻し、シュラフから抜け出す。

ここからまず大無間への分岐となる三方嶺まで登り返す。この朝も秋晴れで、優しい風が尾根を吹き抜けていく。三方嶺は腰位の笹に覆われたピークで、気持ち良く泳いでいける。踏み跡がそれなりにあり、おせっかい赤テープが山のようにあるので迷うことはない。暗い針葉樹の斜面を下った後、笹に覆われた広いコルに出る。

三方窪へは腰くらいの笹を、泳ぐように掻き分けて登っていく。低木や時折現れる苔むした倒木に道を塞がれるが、このような道のはっきりしない所では童心に帰ることができる。三方窪は膝位の笹に覆われた凹状の平地に、巨大な枯れ木や倒木が点在している。そして、倒木の根元からは若木が生えている。笹の中にぽつんと佇む枯れ木は一見すると死の象徴だが、よく見れば根元からは新たな生命が育っている。ここには生と死が混在しているのだ。

暫く腰までの笹を泳ぐと、尾根上の木が皆伐されていてプレハブの作業小屋が現れる。チェーンソーの音が下から聞こえてくる。いよいよ里が近くなってきたのだと実感する。また、心なしか去年よりも木が伐採されている気がする。

朝日岳が近くなると笹が無くなり、潅木が密生してくる。踏み後はあるが、ザックは引っかかるわ枝に顔を引っ掻かれるわでスピードが鈍る。こうなると心は下山に傾いてくる。朝日への登りはこれが最後だと気合を入れ、潅木を掻き分ける。

朝日に辿り着く頃には、空が徐々に暗くなり始めてきた。やはり今回も最後は雨なのだろうか。山頂では中年のご夫婦が休んでいて驚かれる。何しろ道の無い所からのっしのっしと現れたのだから当然だろう。彼らにパンをいただいて、久々の下界の味を口にする。晴れていればここから富士山（だけ）が見えるそうだが雲に隠れてしまっている。ここまで来たら

後は下山パワー全開で下るのみだ。
ここから寸又峡温泉までは1300ｍの急降下。名残惜しむことなく一気に駆け下りる。そして、寸又川の長い吊り橋を渡って終わり、と思いきや最後に温泉街への登り返しがあった。この橋から温泉街までは、長次郎雪渓から熊の岩ぐらい長かった（んなこたぁ無いけど）。
温泉街に入るとそこはもう下界。昨日まで人に会ったとしても一日一桁だったので、いきなり人に酔いそうになる。一まず町の公衆浴場へ行き汗を流す。一年越しの寸又峡温泉だけに格別の気持ち良さだ。この頃には雨が降ってきた。下の駐車場に荷物を置いて、下山祝いとばかりに夕飯を食いに行く。食堂のおばちゃんにおまけをしてもらった。
雨が強くなってきたので、駐車場のあずまやの下で寝ることにする。今日までの山歩きを振り返って第一に思ったのは、いざやってみると下界の生活の方が遥かに難しいということだ。結局のところこれは自分が歩けばいいだけの話。下界のように小難しいことは一切無いのだ。まだ海までの数日あるが、この先帰ってからの生活を考えると途端に憂鬱になってしまう。一まず今は海までのことを、そして、これから登る山のことを考えて寝ることにしたい

１０月４日
今日からはラストスパート、こと炎の下界歩きだ。下界の道は舗装されており傾斜も山のようには無いので、スピードは一気に上がる。と同時に心配なのが体への反動。何しろ去年の深南部の縦走では、台風で足がずぶ濡れになった後に林道を歩きまくったので、その日の終わりには足が使い物にならなくなってしまった。悲しいかな、今日は雨。しかも昨日より更に強くなっており、止む気配は全く無い。更に地元のおじさんにベンチで寝ていたことを怒られる。それは別に構わないが、常識とか言う言葉を持ち出すのは止めて欲しい。
半ばやけになって突撃する。下界での唯一の楽しみは歌いながら歩くことだが、自分が知っている曲の殆どは歌った気がする。千頭駅までは早かったがそこからが長かった。おまけに雨のせいで足の負担が増大し、山では全く異常が無かった足が悲鳴を上げ始める。大井川は山の間をうねるようにして流れているので、下界にいながら南アの絶望的な林道の気分を味わうことができる。
川根の道の駅で先の情報を聞き、とりあえず川根温泉まではがんばろうと決める。ここまで来ると足を動かすだけだ。話通り川根温泉は素晴らしい所で、道の駅が併設されていて寝ることは勿論、テレビまで見ることができた。今日の疲れを癒すべく、ゆっくりお湯に浸かることにする。風呂で島田から来たというおじさんと少し話す。彼も若い頃に旅をしたことがあったらしく、いろいろ話してくれた。いつかは自分もこの旅の話を見知らぬ少年にすることがあるのだろうか。こうした出会いがあると、運命というものを信じてみたくなる。風呂上りに温泉前の食堂に行く。ここでも店のおばさんが優しくしてくれて、土産（アメだけど）も大量にいただいた。下界であっても旅をすれば良い出会いがあるし、起こられたりもする。また自転車で放浪もしたくなってきた。そんな川根での一夜だった。

１０月５日
この旅はいつから始まったのだろうか。歩き始めたのは勿論山の始まり、日本海親不知だ。しかし、ある一つの旅がそれを思い浮かべた時から始まるのだとしたら、僕はずっと歩き続けてきたことになる。いくつもの頂と、いくつもの夏を越えて。その長い旅も漸く今日終わる。
雨は相変わらずじゃばじゃばと降っていた。ここまで来たら後は気力勝負なので、大雨上等と言わんばかりに、薄暗い中出発。昨日と同様歌いながら歩く。トンネル内は排気ガス臭いが、声が反響して歌が上手くなったような気分になる。不思議なことにその場面に合うような歌が頭の中に浮かんでくるので、時間だけは瞬く間に過ぎていく。しかし、歩きなので一向に距離は縮まらない。ラスト25km位から河口までの距離が表示されるが、その時はまだ川は山の中である。静岡の地形の恐ろしさを思い知った気がする。
あと20kmを切った辺りから漸く空が広くなり、谷間の閉塞感から開放される。いつの間にやら川幅も見たことが無いくらい広くなり、連日の大雨で濁流と化していた。この辺りから大井川に沿ってマラソンコースが整備されていたのでそこを歩くことにする。雨のお陰で

休む気にもなれず、河口へまっしぐらだ。
道中新幹線の高架下を潜る所があり、それが見えなくなるまでに何十本もの新幹線が一瞬で駆け抜けていった。あれに比べれば僕なんか蝸牛のようなものだ。人間が開発した移動手段はどれも人間本来のスピードを超越してきた。つまり、それがなくてはならない今の社会の早さもまた、次元を超えたもののように思えてくる。以前岳人にあった記事の一節『ストライキをしたポーターに理由を尋ねたところ、彼らは「私たちはここまで速く歩き過ぎてしまい、心を置き去りにしてしまった。心がこの場所に追い付くまで、暫くここで待っているのです」と言った』（岳人 2004 年 2 月号）というのを思い出した。僕もまた、日常生活でいろいろなものを置き去りにしてしまった気がする。この旅が終わってから、その先はまだ漠然としている。そして、また日常へと戻っていけるのかという不安に駆られる。
いよいよ最後の 5 キロになったが、ここからがとにかく長かった。足は当に限界がきているし、歌のレパートリーも尽きてきた。下界を歩くことがここまで辛いとは、出発前は想像もつかなかった。おまけに風も強くなってきて海抜ほぼ 0 m なのに寒いったらありゃしない。
それでも歩いていれば、いつか目的地が見えてくる。いつの間にやら遠くには水平線が見えてきた。大井川の対岸も遥か遠く。僕はこの川の始まりから、いくつもの頂を越えてやってきた。始めは一筋の清冽な流れも、今ではこんなに大きく幾筋もの濁流になってしまった。そして海に還り、再び始めの一滴として、山に降り注ぐのだろう。河口付近は工業地帯になっており、工場の騒音や臭気が立ち込めている。山であれだけ綺麗だったもの達の面影は、ここには無い。この川の流れや空気が人を表すのだったら、それは必然的に滅びへと向かっていく。しかし、川はその流れの中で、ひときわ美しい清流や瀑布を作ることがある。僕もきっと、人生のうちのどこかにある、一際自分が輝きを放つ時を求めて、川のように流れていくのだろう。
14 時 20 分、28 日前とは違った大海に到着する。そして、波打ち際で高らかに、雲に嘯くと春寂寥。そして、母校の校歌を歌った。歌い終わると同時に、波に駆け出し飛び込む。しかし、あまりの寒さにすぐ海から上がった。そして、海を一瞥し踵を返す。この時点でもう次の旅は始まっている。目的地はいつだって、到着と同時に通過点になってしまうのだから。
夏の旅。それはいつの頃からか始まった、未知なるものと、未知なる自分に出会いに行く旅。そして、自分を突き動かす熱き魂の躍動なのだ。僕はこれからも、未だ見ぬ虹を求めて、心赴くままに旅をしていくことだろう。

Epilogue　回帰

電車はしとしとと降りつづける雨の中、のどかな田園地帯を走っていた。平日の真っ昼間ということもあり、車内の人影はまばらだ。特に混雑した様子も無いので、BOXシートに陣取って，車窓からの風景を眺めていた。

今朝は豊橋からの始発に乗り、乗換えを含めて5時間くらい経っただろうか。電車は密集した住宅地や郊外の田園地帯、深い山間をあっと言う間に駆け抜け、今はいつか見た伊那谷を走っている。僕が半月ほどかけて歩いた距離も、文明の利器の前では一瞬で移動してしまう。鈍行でローカル線として名高い（!?）飯田線であっても、瞬く間に過ぎ去っていく現実が恨めしく、少し寂しくもあった。おそらく今目の前にあるのは、普通の生活を送っている人にとってはただの日常なのだろう。しかし、僕にとってその日常は残酷だ。時間を得ることの代償に、人は移動することを無味乾燥したものにしてしまったように思える。

この一ヶ月、僕は社会から見れば蝸牛のようにゆっくりと歩いてきた。しかし、速過ぎる日常の中では決して見ることのできないものを見、得られないものを得てきた。そして、それは僕にしか見えないものなのだ。

電車はいつの間にやら駒ヶ根を過ぎ，伊那市が近付いてきた。猿岩へ続く田園風景も、坂を駆け下りる時に見下ろす街並みも、一月前出発した時と変わらぬままに広がっていた。見慣れた街がこれほど懐かしいとは、思ってもみなかった。でもそんな郷愁は、同時に旅の終わりを意味している。

電車が止まり、伊那市駅のホームに降り立つ。丁度30日前、僕はここから親不知を目指した。そして、巡り巡って今度は大井川の河口から還ってきた。一月前ここにいた自分と、今の自分は何が変わっただろうか。恐らくは大して変わっていないだろう。結局僕は誰かに支えてもらわなければ、山に登れないし旅もできない。ただ一つだけ言えるのは、心の中に描く旅が、より壮大で困難を伴うものということだ。一月前、ここからこのたびを始めたように、次なる旅をここから始めるのだ。

外は生憎の雨。軒下で合羽を着て歩き出す。

商店街のアーケードを潜り、道路を横断する。すると何故だか、目の奥から熱いものが込み上げてきた。そこにあるのは最早見飽きた、普通の町並みだというのに。しかし、一月という時間がただの街並みを、感動を呼び起こす街並みへと変えたのだろう。道路脇に佇む街路樹が、競うようにせり出した商店の看板が、連日の雨で、いつにもまして濁流となっている河の流れが、僕に帰ってきたということを実感させた。

僕は最後に、この風景に出会うために旅立ったのだ。

夏は、瞬く間に過ぎていく。けれども如何にそれを熱く生きるか、そして、それを続けるかで、人生における夏の価値が違ってくるのだ。この一ヶ月間、少々延長した一夏の思い出は、僕の次なる夏を強く支えてくれることだろう。

肩の小屋の盾になっているピークと、槍の間のコルに出るなり、僕は横殴りの猛烈な風雨に晒された。たまらず足取りは速くなり、大槍への登り口に取り付いた。幸い風下だったために、風雨は幾分収まった。それでもずぶ濡れのまま登らなければならないことに変わりは無い。周囲に人影は無い。皆この嵐を小屋でやり過ごしているのだろう。そんな静かな山が、ここではこんなひどい嵐の時しか味わえないのが恨めしい。

何度もここには足を運んでいるが、今回が紛れも無く最悪の天気だ。晴れの日は嬉々として登るというのに、今は何故山頂を目指すのかを自問自答している。たかだか標高差にして数十メートル。数十分で往復できる、鎖も梯子も何でもありの山頂だというのに。

この天気で岩もびしょ濡れのためか、いつもより慎重に進んでいる。それでもあっと言う間に頂上直下の梯子まで来てしまった。見上げれば、黒々とした岩と真っ白なガス。ガスの濃さも絶望したいくらいに濃密だ。溜め息をつき、梯子に手をかける。無機質な金属の感触が、ずぶ濡れの軍手を通して伝わってくる。一段一段確かめるように登り、山頂に出た。

相変わらず狭いスペースには、三角点と祠がある。頂を残して、世界は真っ白なヴェール

に包まれている。思えばこの世界を一人占めするのは初めてだ。でもそこに特別な感動は無い。結局のところ、そんな荒涼とした世界に残されるのは空しさだけなのだ。それでも頂に立つことには、きっと大きな意義があるのだ。例え、今はこの場所がどこからも見えなくても、僕の心には槍の穂が悠然と聳えているのだ。

ほんの数分で僕はここを後にし、小屋へ戻る。静かな山が好きと言っても、こんな荒涼とした世界に未練は無い。またいつか晴れた日に、僕はここから、僕が歩いてきた世界を見下ろすのだ。山は、そして旅は終わらないのだ。

Ⅱ、行動の記録

9/6　14:00 伊那市駅～23:09 親不知駅
9/7　5:45 起床 6:20 出発～7:20 親不知～11:35 シキ割～12:50 白鳥山～16:35 栂海山荘
9/8　5:00 起床 6:15 発～8:45 黒岩山～13:00 朝日岳～13:40 朝日平
9/9　2:00 起床 3:45 発～7:45 雪倉岳～10:35 白馬岳～13:30 天狗荘～17:30 唐松山荘
9/10 3:30 起床 5:30 発～7:25 五竜山荘～8:30 五竜岳～11:20 キレット小屋～13:10 鹿島槍ヶ岳～14:15 冷池山荘
9/11 5:30 起床 640 発～8:00 爺ヶ岳～9:40 岩小屋沢岳～11:40 赤沢岳～13:45 針ノ木岳～14:30 針ノ木峠
9/12 3:30 起床 5:20 発～6:05 蓮華岳～7:45 北葛岳～9:25 船窪テン場～11:25 船窪岳～13:40 不動岳～15:00 南沢岳～16:05 烏帽子岳～16:50 烏帽子小屋
9/13 4:00 起床 5:15 発～9:20 水晶小屋～10:00 水晶岳～10:55 水晶小屋～12:05 鷲羽岳～12:50 三俣山荘～14:00 三俣蓮華岳～15:05 双六岳～15:40 双六小屋
9/14 2:30 起床 5:30 発～9:00 槍岳山荘～9:30 槍ヶ岳～12:00 南岳小屋
9/15 3:30 起床 5:00 発～7:05 北穂小屋～8:45 涸沢岳～8:55 穂高山荘～9:45 奥穂高岳～11:50 天狗のコル～13:25 西穂高岳～15:20 西穂山荘
9/16 5:00 起床 6:30 発～8:20 焼岳小屋～9:40 焼岳～11:25 中の湯～15:00 白骨温泉
9/17 4:00 起床 5:30 発～8:30 十石避難小屋～16:30 畳平
9/18 4:00 起床 5:40 発～6:45 剣ヶ峰～9:50 登山口～18:00 日和田口
9/19 4:30 起床 5:45 発～10:05 継子岳～12:05 剣ヶ峰～15:45 開田口～17:30 西野
9/20 6:30 発～10:30 地蔵峠～19:30 新和スキー場
9/21 4:00 起床 5:10 発～11:10 木曾駒ケ岳～12:05 宝剣岳～14:45 檜尾岳～14:50 檜尾避難小屋
9/22 4:30 起床 5:55 発～8:20 木曾殿乗越～9:30 空木岳～12:00 池山避難小屋～13:40 登山口～ 18:00 天竜大橋
9/23 7:30 発～13:00 市ノ瀬
9/24 6:00 起床 7:25 発～8:30 柏木～13:00 松峰小屋
9/25 4:00 起床 5:15 発～9:25 仙丈ヶ岳～11:45 伊那荒倉岳～13:30 横川岳～14:30 両俣小屋
9/26 4:00 起床 5:30 発～6:45 左俣大滝～10:10 北岳～11:10 北岳山荘～12:40 間ノ岳～13:30 三峰岳～14:30 熊ノ平小屋
9/27 4:00 起床 5:15 発～9:15 塩見岳～10:00 塩見小屋～12:35 三伏峠～13:55 烏帽子岳～15:00 小河内岳避難小屋
9/28 3:00 起床 4:40 発～7:10 高山裏避難小屋～10:20 前岳～11:15 東岳～12:05 前岳～12:50 荒川小屋
9/29 2:30 起床 3:40 発～5:55 赤石岳～7:30 百間洞山の家～9:10 大沢岳～10:45 兎岳 12:55 聖岳～14:05 聖平小屋
9/30 6:00 起床 7:25 発～9:25 上河内岳～10:20 茶臼小屋～11:55 茶臼岳～11:55 仁田岳～13:25 易老岳～15:50 光小屋～16:15 光岳～16:25 光石～16:55 光小屋
10/1 5:00 起床 6:30 発～7:05 百俣沢の頭～9:20 信濃俣～13:55 大根沢山～15:10 アザミ沢のコル
10/2 4:00 起床～5:10 発～7:05 三方嶺～13:20 朝日岳～16:05 寸又峡温泉
10/3 7:10 発～10:10 千頭駅～18:00 川根温泉
10/4 5:30 発～14:20 大井川河口～藤枝駅～豊橋駅（駅寝）
10/5　豊橋駅～伊那市駅

Ⅲ、雑感　そして、夏を旅する

「おーい松本、俺はこの夏日本アルプスを縦断するぞ～！！！！！」
これは六月のある晴れた日の常念岳での出来事。その時はまだできるかどうか半信半疑だったが、やってみたらあら不思議。できてしまうものである。まあ、あの時のギャラリーは一年の佐山と他数名しかいなかったが、あそこまで高らかに言っておいてできなかったら、というかやらなかったらかなりの大恥である。それだけに少しは面目が立って安心しているところである。
日本アルプス縦断縦走。この漠然とした旅はいつから僕の頭に入り込んできたのだろうか。今年で山を登るようになって５年目だが、高校の頃は年一回、三泊の夏山がメインイベントでそれ以外はせいぜい月一くらいしか登っていなかった。今思えば非常に勿体無かった、勿論今の性格は高校のヤマ部で形成されたので、それはそれでかけがえのない日々だったが、山に浸るといえるような山には登っていなかった。しかし、この頃過激派の先輩がこれをやったという話を聞いたので、思えばその時から始まっていたのかもしれない。
大学に入ってからは驚きの連続であった。何しろ山岳会には、今までの自分の山登りとは全く違う合宿や山行。そして、山に対して超本気オーラを出している先輩が山のようにいるからである。特に今まで経験したことの無かったジャンルの山登りではそれに引き込まれると共に、もっと真剣にやらなければと感じる自分もいた。そして、ただの夏の登山道では満足できない自分もいた。
ここで感じるままに、新しい世界に突っ走ろうとする選択肢はあった。しかしそれを許さない自分はこう言った。今までの山登りを中途半端にしたままでいいのかと。結局僕は後者を選択した。
いざやるといっても体力、そして何より気力が問題である。そこで僕はこれ仁向けていくつかの試練とも言うべき山行を課した。第一弾は八ヶ岳全山～松本（自転車有り）の１ DAY。とにかく一日中動き続ける気力と体力を試すものだ。第二弾は会の縦走合宿、北アルプスＪ走である。これは今までの自分の山行の中で最長の期間であると共に、もっとも馬鹿げたコース取りである。これは長期で山に向き合う力と、何よりも山屋に重要な馬鹿になるための山行である。そして、止めの熊の岩への歩荷。これで精神的な下準備は万全である。実際辛いときに思い出したのは、これらの山行であった（勿論他のもあるが）。
と、ここまでは大見栄を張っているが、実際は途中で食料を買い足したり、デポもしたりと、歩く体力と気力さえあれば誰だってできる計画である。それに、やたらと制約を加えるよりも何でも有り敵な旅にした方が楽しめるだろうと考えた。実際僕は各地で色々な方からご好意を頂戴し、それ無しに計画の完遂はなかっただろう。とはいえ今までの山登りとのけじめであると共に、新たな世界へ踏み込んでいくための試験である山行を完遂できたことは、大きなよろこびであり、それ以上に解放感を感じている。太平洋に辿り着くまでの長い間、今までの山にけじめを付けなければならないということに自分を束縛していた感がある。その業から漸く解放された。今僕の胸にあるのは、新たな世界への希望である。僕にとって重要なのは、大井川の河口から次に何をするのか。そして、そのために更に強くならねばならない、いや、なりたいということだ。
記録に関してだが、これは山行記録というよりは旅の紀行（奇行?）文として読んでいただきたい。中途半端なところで章が区切られているのはそのせいである。また、大学生らしからぬ稚拙な文章は、勉強もろくにせず山に登っている愚学生の文ということでご容赦いただければ幸いである。

最後になりますが、このような山行に送り出して下さった片寄リーダーをはじめとするする現役の皆。事前の相談やら愚痴やら色々聞いてくださったOBのぼんど（大木）さん。お忙しい中留守を快く引き受けて下さったOBの豊田浩太郎様。そして、各地の山で出会った夏の旅人達に感謝いたします。

おまけ

ふい～～～…、漸く終わりました。いつもの悪い癖で長々と間延びさせてしまい、脱稿もこんなに遅くなってしまいました。この日がまさしくぼくの「原稿をちゃんと書かなければいけない」業からの解放であります。季節はもう秋が終わり冬になってしまいました。速く次の山に移らねば。そして、記録を簡潔に書くのが今後の課題といえましょう。なお、冒頭にある高校時代の自転車のお話がどうしても気になる方は、群馬県のとある田舎都市にあるM高校の生徒会室に侵入して生徒会誌のバックナンバーを調べるか、伊那の僕の部屋の本棚をあさって下さい。

筆者紹介　高橋昭彦（高橋旅人）

四季の山を楽しむ傍らフリークライミングにも精を出すが、どちらも中途半端な19歳（当時）。今回の縦走や八ヶ岳1 DAY（夏）のような真面目な山行をやる一方で、学校では図書館の外壁や30番教室の壁を登っては変な目で見られている。山や岩場では爽やかな好青年を装っているが、山岳会の現役内でも屈指の電波系変人として恐れられている。無意味に自転車を乗り回すことを得意としており、伊那～松本間は30往復以上。実家へも自転車で里帰りする。出身は群馬で、高校時代は男子校にいたという暗い過去を持つ。好きな山は谷川岳、槍ヶ岳、深南部。心の山は地元の榛名山。信州大学山岳会2年。

ご意見、ご感想、お怒り等等ございましたらこちらまで
a032038@amail.shinshu-u.ac.jp
tabito-of-summer2004@ezweb.ne.jp
長野県上伊那郡南箕輪村9565－104

後我記（あとがき）

瞳を閉じれば

ふっと あの日の青空、
と、とある歌にありますが、
今でも一日一日が思い出されます。
が、思い出に浸るだけでは
進歩無し。次のあこがれ目指
してやって参ります。

では、殷!!

2005.1.21 ~~Ta~~ Ho.T.

S A C

云鬼

信州大学
山岳会.

by 松田.T